

[50] Crossover

<https://hdl.handle.net/2324/7430663>

出版情報 : Crossover. 50, pp.1-, 2025-03. Graduate School of Integrated Science for Global Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



CROSSOVER

No.50 March,2025



ISGS

九州大学大学院

地球社会統合科学府

Graduate School of Integrated Sciences for Global Society

Contents

巻頭言

学際融合教育・研究への挑戦	大野 正夫	1
---------------	-------	---

新任教員紹介

言にくいことを言う、声をあげる	ハオ シャオヤン	2
半獺半教を目指して	安田 章人	3
言語変化の「足跡」をたどる	朱 冰	4
「社会学者」らしくない社会学者	毛塚 和宏	5
〈個〉の探究から始まる研究の広がり	和田 崇	6
白地図に色を塗る	澤藤 りかい	7

英国学士院国際会員選出報告

英国学士院国際会員 (International Fellow of the British Academy) に選出されました!	溝口 孝司	8
--	-------	---

受賞報告

伊波普猷賞を受賞して	木土 博成	9
第22回(2023年次)農学会 日本農学進歩賞	松尾 和典	10
第29回日本比較文学会賞 受賞報告	大場 健司	11
九州考古学会奨励賞 受賞報告	足達 悠紀	12
英語コーパス学会 学生新人優秀発表賞を受賞して	前田 裕司	13
第21回徳川奨励賞 受賞	丸山 大輝	14
現代韓国朝鮮学会「小此木賞」を受賞して	山口 祐香	15

自著を語る

『新しい政治改革へ』の道案内	岡崎 晴輝	16
『データを用いたことばとコミュニケーション研究の手法』	大津 隆広	18
近代チベット政治外交史—清朝崩壊にともなう政治的地位と境界— [第46回サントリー学芸賞(思想・歴史部門)受賞]	小林 亮介	19
人物叢書『高台院』	福田 千鶴	21
『護るために殺す?アフリカにおけるスポーツ ハンティングの「持続可能性」と地域社会』について	安田 章人	22
『Art is from but beyond life』— 研究と私の物語	李 曉燕	23

アクティビティ

第27回国際昆虫学会議(ICE2024 Kyoto)の成功に思うこと	阿部 芳久	24
国際シンポジウム「気候変動とZ世代へつなぐ人類の未来」	菅 浩伸	26
科学潜水啓発シンポジウム 「科学潜水とフィールドでの安全管理が拓く科学のフロンティア」	菅 浩伸	28
【報告】学際統合的な視点からみた継承語教育研究プロジェクト	松永 典子	30

博士論文を書き終えて

紆余曲折を経て博士論文を書き終えた経験から	上野 弘人	32
研究・生活の嗅覚	陳丁 ショウ	33
椎木講堂での学位記授与式を終えて	藤原 拓広	34

大学院データブック

地球社会統合科学府 令和六年度 修士課程 修士論文題目一覧	35
-------------------------------	----

表紙の説明

ロゴマークは、「地球社会統合学府」の6つのコースを表わしています。すなわち「地球社会統合学府」そのものです。本学府の理念にある「現場主義の精神」、「フィールドワークによって諸問題を究明する」姿を、ロゴマークが地球規模の遥かなる未知の領域へと飛び立つ姿、または、地球と地域をリードしていく姿の象徴として表現しています。

学際融合教育・研究への挑戦

大野正夫

(地球社会統合科学府 学府長)

地球社会統合科学府は「地球社会的視野に立った統合的学際性」を教育の理念に掲げる大学院です。すなわち、一つの専門分野に閉じることなく、文系・理系の枠をも超えた統合的な学際性に立脚して様々な研究課題を究明するような人材を養成することを教育の目標として掲げています。しかし、文系・理系の教員・学生が、同じ学府あるいは研究院にいても、すぐに文理融合・学際融合の研究・教育ができるわけではありません。文系・理系の教員・学生が、一緒になって活動する、例えば一緒になってフィールドに出かけて調査を行う（いわゆる“同じ釜の飯を食う”）ことで、時間をかけて文・理が融合し、新しいものが生まれるということを、地球社会統合科学府設立から十余年を経て我々は実感してきました。

地球社会統合科学府は2014年に設立され、今年度、設立11年目を迎えました。その前身は1994年に設立された比較社会文化研究科に遡ります。比較社会文化研究科は教養学部改組により、文理両方の教員・学生の在籍する組織（ギリシャ文字のΠに例えてパイ型と呼ばれた）として誕生しました。私自身は2000年に比較社会文化研究科に着任しましたが、当時の感想としては、周りを見渡すと文系・理系両方の教員・大学院生がいるけれども、文・理が融合した教育・研究が大いに進んでいるという状況では必ずしもなかったと思います。



(写真:カンボジアでのフィールド調査実習)

その後、地球社会統合科学府の発足とともに、この状況が劇的に変わったという実感があります。即ち、学際融合の教育・研究が一気に加速したように思われます。その推進力となったのが、学府発足とあわせてスタートした「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」と「フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム」の二つの大きな事業であることは間違いないでしょう。そこでは、数々の国際シンポジウム、ワークショップ、国内外でのフィールド調査実習等が繰り広げられました。私自身も、北海道、沖縄、そして、カンボジア、等々、での様々な活動に参加しました。これらの活動では、文系・理系両方の教員・大学院生が一緒になって、様々な課題に取り組みました。同じ釜の飯を食いながら一緒になって活動することで、文・理が融合し、新しいものが生み出されたと確信しています。これらの活動は個人的にはとても楽しい思い出です。「グローバル人材養成プロジェクト」「フューチャーアジアプログラム」は、研究・教育の両面で大変有意義な成果を挙げて数年前に終了しましたが、これらの事業の成功を背景に、2021年に「未来共創リーダー育成プログラム」がスタートしました。九州大学の複数の学府が協力して設置した文理横断の副専攻型プログラムで、地球社会統合科学府が基幹学府を務めています。「グローバル人材養成プロジェクト」と「フューチャーアジアプログラム」で培ったノウハウを受け継ぎ、ここでも大きな成果を挙げています。このプログラムもあと1年で終了しますが、今、我々はさらにその先の展開を模索しています。また研究面では、文理融合の考古学研究拠点である「アジア埋蔵文化財研究センター」や、水に注目し学術分野を横断する新たな学問「水共生学」プロジェクトを中心として、その他にも様々な学際研究を推し進めています。

以上のように、地球社会統合科学府は様々な学際融合の教育・研究の事業を推し進めてきました。これらの活動への皆様の積極的な参加を歓迎します。そしてこれらに続く次なる展開、次の新たな学際融合の教育・研究への挑戦のご提案を心よりお待ちしております。

言にくいことを言う、声をあげる

ハオ シャオヤン

(地球社会統合科学府 社会的多様性共存コース)
(比較社会文化研究院 文化空間部門 文化表象講座)

小学生の頃、月に一回ほど、最寄りの映画館で映画鑑賞する学校行事があり、それは毎月の楽しみでした。後にその映画館は史跡として指定され、保護されることになりました。いつも通っていた北陵映画館は、実は戦後戦犯裁判の場所だったのです。

その後時は流れて、大学院時代、私は奇しくもその場所で行われていた戦犯裁判についての研究を進め、その成果をイギリスの学術誌に論文として発表し、博士論文の一章に収録しました。論文全体では戦犯裁判・戦後補償裁判・市民法廷における戦時性暴力の取り扱いに焦点を当て、女性の声や苦しみがいかに無視され、周縁化されてきたかを分析しました。

保守的な環境で育った私は、実のところ長い間ジェンダー問題に対して無関心でした。よく考えると、ジェンダーについて研究することを通して、自身の置かれた(家父長的な)環境を対象化できるようになっただけでなく、社会におけるマイノリティ問題に対しても、さらに耳を傾け、共感できるようになりました。現在はその延長線上、表象分析の手法を学びながら、戦時性暴力の被害者がどのように記録・表象されているのかについても共同研究を進めています。

その後、名古屋大学ジェンダー・ダイバーシティセンターの特任助教に採用され、女性研究者の増員策や支援に関わる業務を担当しました。その中、トイレにナプキンというプロジェクトにも携わり、生理用品について興味を持つようになり、そのテーマについて研究しています。

へえ~それぞれかなり異なるプロジェクトですね。そう人から言われたり、あるいは自分自身でもよく考えることがあります。私は一体何について興味を持っているのでしょうか。戦時性暴力と生理用品以外にも、もう一つアイデアがあり、それを必ず研究しようと思っています。よくよく考えると、これらのプロジェクトには、大きな共通点があります。それは、いずれもタブー視されていること、言にくいこと、または、声をあげにくい人たちの存在に関わるテーマということです。これは、2024年に出版され話題書となっている阿部幸大氏の『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』という本の「研究と世界をつなぐ」ことの重要性についての指摘と重なります。私自身の研究と世界とのつながりは、非合理的なタブーを打ち破り、言にくいことを言ったり、声をあげにくい人たちの声をあげることを通し、社会正義の

実現を目指したいのです。

もう一つの目標もあります、それは、研究という他者との関わりを通じ成長し、自分自身についてもさらに知りたいのです。他者の存在は、人間性の形成やPTSD被害者の回復において必要不可欠な存在だと指摘されますが、研究における他者との出会いもまた、私にとって重要な意味を持っています。研究で出会う他者には、二つの種類があります。まず一つは、資料に登場する人物や日常生活で関わりのない研究者同士です。資料に登場する人物については、その人生を追体験することで、自分自身の人生を広げられ、深められます。ほかの研究者については、その研究をレビューすることで、学術コミュニティに参入することを通して、新たな会話が生まれ、ある種の関わりが形成されます。もう一つは、日々関わる同僚・研究者同士・学生です。いずれも、こうした関わりを通して、今までの経験や感覚を見直し、自分自身に対する理解を深めたいのです。

九大を卒業し、名大で勤務したのちに、再び九大に戻ることは、私にとってホームカミングのような経験です。これから、私と関わりを持っているすべての人々と共に、成長していきたいと思っています。



九州大学伊都キャンパスにて

半猟半教を目指して

安田 章人

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

(基幹教育院 人文社会科学部門)



愛犬とともに猟場にて

2024年4月より地球社会統合科学府の担当になります、安田章人と申します。よろしくお願ひいたします。「専門は?」と聞かれると、「環境社会学と地域研究です」と言ってきましたが、最近では、「狩猟学です」と答えるほうが多くなってきました。というのも、ディシプリンにとらわれず、人が他の動物の命を奪うという象徴的な活動である狩猟に関するものであれば、なんでも手を付けるようになってしまったためです。

幼少のころから家で犬を飼っていたことや、自然豊かなカナダに住んでいたことが引き金になったのか、私はずっと動物好きでした。そのため、将来は動物園の飼育員や野生動物を護る国立公園のレンジャー、野生動物の生態を研究する学者になりたいと夢を描いてきました。しかし、東京農工大学農学部に入った際に、環境社会学の第一人者の鬼頭秀一先生に出会い、「動物を護ることってなんやねん」(関西人です)という根本的な問いにぶつかり、野生動物保護を社会科学的に考える道へ進んできました。さらに、海外で研究することの憧れから、大学院では、アフリカでのフィールドワークを必須とする京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻に入学しました。その後、学振PDや非常勤講師を経て、九州大学に赴任しま

した。

そんな私の研究テーマは、「狩猟を通して考える、人と動物の共存関係の構築」というもので、国内では有害鳥獣捕獲や一般狩猟、海外では娯楽のための狩猟であるスポーツハンティングに注目し、北海道や福岡、アフリカのカメルーン、ハワイをメインフィールドとし、調査研究をおこなってきました。深刻化する国内の野生鳥獣問題や、観光活動であるスポーツハンティングと地域社会の関係を目の当たりにして、「持続可能性とはなにか?」と考え、「娯楽のために動物を殺すなんて残酷だ」という声を直接耳にして、「命を奪うとはなにか?」を考えてきました。

とはいえ、考えてもわかることは少ないです。やってみなければ。ということで、2012年に私も狩猟者となりました。銃と罠を使い、イノシシやシカ、カモ類を狩猟するほか、所属する猟友会では、有害鳥獣捕獲捕獲隊にも入り、1年を通して、狩猟をおこなっています。そんな私が、100haもの緑地が残され、イノシシが息息する伊都キャンパスに赴任できたことは、天啓と言わずして、なんと言ひましょうか。大学内では、箱罠を使ってイノシシを捕獲しています。2014年に九州大学狩猟研究会という大学公認サークルも立ち上げ、伊都キャンパスのイノシシを捕獲し、学生とともに解体消費することで、命とはなにかを、頭だけではなく、五感を通して考えています。

こうした経験を、地球社会統合科学府での活動に生かしていきたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

言語変化の「足跡」をたどる

朱 冰

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

(言語文化研究院 言語環境学部門)

2024年6月に本学府に加えさせていただきました朱冰(シュヒョウ)と申します。中国山東省出身で、大学卒業までの間、「孔孟の郷」とも称されるこの地で過ごしてまいりました。多くの留学生と同じように、大学院進学を機に来日し、気づけばすでに13年経っています。名古屋大学で6年半の留学生活を送り、その後関西学院大学にて2年間務めたのち、2020年4月にご縁をいただき、本学言語文化研究院に着任致しました。東海から関西、そして九州へと日本国内でずっと西へ移動してきましたが、地理的には実は母国の出身地に近づいています。現在は、主に基幹教育の中国語教育に携わっています。着任早々にコロナのパンデミックに見舞われましたが、多くの試練を学生と共に乗り越え、今も充実した教育・研究の日々を送っています。

私の専門分野は言語学で、特に認知・機能主義的言語学と言語類型論のアプローチから、文法的变化、いわゆる「文法化」に関する研究を行っています。主な研究対象は母語である中国語ですが、日本語をはじめとする他言語との対照研究にも関心を持っています。言語は絶えず変化するものと言われていますが、その構造や意味機能がどのようなメカニズムに基づき、どのような経路で変化してきたのかを追うことは、謎解きや宝探しのようで、常にワクワクしながら取り込んでいます。このような「足跡」をたどるプロセスは、言語変化の規則性を見いだすものだけでなく、人間の認知能力の解明にもつながると思われま

す。これまで主に中国語のモダリティ表現に焦点を当て、その多機能性、とりわけ典型的なモーダルの意味(例:可能性、必要性、必然性)から拡張した意味機能(例:接続的機能、談話的機能)について、認知的構文文法と文法化の観点から記述と説明を行ってきました。モダリティ表現は、しばしば人々の「心的態度」を表すものとされ、その多様な意味機能と発達・変化に惹かれ、一貫した研究を進めています。

また、これまでの研究では、言語類型論の視点も積極的に取り入れてきました。どの言語を研究対象にするにしても、個別言語の詳細な記述的研究が特定の言語現象に対する理解を深める一方で、その現象を世界の言語全体の中で位置づけて観察し、言語間の共通性と多様性を考える視点も欠かせないと考えています。

最後に、本学府での研究指導について少し述べさせていただきます。大学院への進学は、将来の計画や自分の適性、経済的状況などを総合的に判断して決めるべきものです。特に、人文系の研究環境が必ずしも恵まれているとは言い難い現状において、博士課程への進学は、慎重に熟慮し、決断したからには全力で研究に取り組む覚悟が求められると考えています。教員として、一定の学力はもちろん、自分がやりたいことをしっかりと見だし、それを遂行する意欲を持った学生と出会い、全力でサポートしていきたいと思っています。



趣味の旅先で出会った、ニュージーランドの山と湖の絶景

「社会学者」らしくない社会学者

毛塚 和 宏

(地球社会統合科学府 社会的多様性共存コース)
(比較社会文化研究院 社会情報部門 社会変動講座)



2022年8月5日 アメリカ社会学会(ロサンゼルス)にて

九州大学に2024年7月に着任する前、別の大学の教員公募の面接を受けておりました。その場で私に投げかけられた質問が非常に印象的でした。まとめると次のようなものだったと記憶しています。

「あなたは修士から10年間ほどの研究歴になるが、まとまった社会学的な成果がないように見える。あなたはこの10年間何をしてきたのですか？」

多くの社会学者は自らの研究テーマを持ち、それを深く探求する研究スタイルを採用しています。その面接官の先生にとって、私の研究履歴はそのような王道から逸脱しており、端的に言えば「毛塚は社会学者ではない」という認識に至ったのではないかと私は解釈しました。

面接官の先生がそう思うのも無理はありません。私の研究はテーマの観点で言えば多岐にわたっていたからです。修士では教育と社会階層、博士では恋愛結婚・見合い結婚の推移を研究し、その後は夫婦の親密性、性別役割分業、「草食化」の研究、男女別学とジェンダーバイアス、少子化と教育格差といった修士・博士から発展したトピックから、モンゴル遊牧民の格差と極

端気候の関連、YouTube上のコメント分析、伝統芸能従事者の寿命に至るまで、しばしば異分野研究者とともに多様な研究を行っていました。このような幅のある研究履歴が「社会学」らしくは見えなかったのでしょうか。

この質問に対し私は「私の研究群には2つの軸があります」と返答しました。「2つの軸とは、合理性と実証です」。

私は数理社会学・計量社会学を専門としています。数理社会学は数理モデルを用いて、計量社会学は社会調査データと統計分析を用いて、社会現象のメカニズムを解明します。また、最近では計算社会科学と呼ばれるビッグデータやオンライン上のデジタルデータを用いた社会科学的な研究領域にも片足を踏み込み始めました。

いずれにせよ、合理性(数理社会学)と実証(計量社会学・計算社会科学)が私の研究の柱になります。これらはある意味で手法に軸を置いた研究手法ですが、これは私の研究のモチベーション——実態とメカニズムの解明、異分野との共同研究——に合致しているのです。

モチベーションの一つは「実態とメカニズムの解明」です。社会学の目的の中に社会現象の記述(How, どのようにになっているのかに答える)とその機序の解明(Why, なぜそのようなになっているのかに答える)の2つがあります。この2つの目的を達成するのに、今の研究スタンスがマッチしているわけです。もう一つは「異分野との共同研究」です。数理・計量社会学は、問題を定式化し、問いとデータ・モデルをうまく結びつけることに長けています。モデル作成や統計分析担当として他の分野・領域と共著・共同研究を行うことで、自らの価値を発揮しつつ、幅広い人間と社会の関係性を分析することができます。このモチベーションでさまざまな研究トピックを扱ってきました。

私が社会学者を名乗っている理由の一つは、そして手法を軸に置いた研究スタンスを取っているのは、多様な社会現象にアプローチできるからです。これからも、数理・計量社会学を軸にしつつ、さまざまな社会現象にアプローチする「社会学者」らしくない社会学者として、研究・教育を進めていきたいと思えます。

※本稿は2024年12月13日に開催された第21回地球社会統合科学セミナーでの報告をベースに大幅に加筆修正をしたものです。

〈個〉の探究から始まる研究の広がり

和田 崇

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

(比較社会文化研究院 文化空間部門)

私の専門は、日本近現代文学と比較文学です。文学研究者と聞くと、幼い頃から本が好きで、青少年期を読書とともに過ごしてきたイメージがあります。実際、私の研究仲間たちはそんな人ばかりです。しかし、私は彼らとは大きく異なります。そもそも私は商業高校の出身で、高校卒業後は大学に進学せず、会社で働いたり派遣労働をしたりしていました。生まれてから大学進学を決意するまでの約20年間、読書とは無縁の生活をしてきました。文学研究を志した当初は、この空白の20年を後悔するばかりでしたが、研究者としてある程度自立するようになると、むしろこの20年が貴重な経験に思えるようになりました。基礎教養に欠けるエリートではない自分だからこそ持てる視点があると、今では考えています。なぜかという、私が主として研究に取り組んでいるプロレタリア文学は、そうした本を読んだことがない、あるいは本を読むことを億劫がる大衆に、いかにして文学作品を読んでもらうかを真剣に考えた文学運動であったからです。一時期を労働者として過ごし、本を読んでいなかった私の経験は、プロレタリア文学の啓蒙対象である大衆の視点を、かつての当事者として共有することにつながっています。

現在まで、プロレタリア文学の中でもとりわけ徳永直を主な研究対象としてきました。徳永に着目した理由は大きく2つあります。1つは、徳永が労働者出身であり、文学や社会における労働者と知識人との関係を体現する存在でありながら、研究があまりされていなかったからです。徳永は戦前と戦後の一時期に時代の寵児となりながらも、死後の評価はあまり高くありません。しかし、彼が評論で主張した大衆論や小説内で描いた大衆たちは、主体性と流動性をあわせ持ち、大衆の可能性と限界を映し出していることに意義があると考えています。もう1つは、徳永の小説のいくつかは、旧ソ連をはじめとする社会主義圏で翻訳されており、日本文学史上の早い時期に、複数言語への翻訳という現象を生んだからです。しかも、それらの翻訳の多くは国家や巨大資本の力を借りない民間主導の試みであり、その背景には国を超えたさまざまな人脈での文化交流がありました。

プロレタリア文学を長年研究して気づいたのは、文学作品はそれ単体で受容されるのではなく、演劇や美術、音楽など複数の芸術と結びつき、さらには、歴史や社会の影響を大きく受けることです。その気づきは、プロレタリア文学を領域横断型の文化

運動の中に位置づけ、総合芸術として捉える視点につながりました。したがって、プロレタリア文化運動を議論する際には、文学や演劇の研究者はもちろんのこと、美術研究者や歴史学者とも協同し、学際的な研究を行っています。また、プロレタリア文化運動は、徳永の作品の翻訳が示すように、国際性を持った運動でした。ただしその国際性は、戦間期(1920~30年代)という同時代的な現象にとどまらず、メタ的な視点で、現在の学術研究においても発揮されています。2017年に私が参加したイギリスのリーズ大学でのワークショップでは、ヨーロッパと日本の研究者たちが、プロレタリア作家をはじめとする〈転向〉の問題をともに議論しました。2022年に私が実行委員の一人を務めた国際シンポジウム「吼えろアジア」では、オンラインを併用しながら、6つの国や地域出身の研究者たちが、東アジアにおけるプロレタリア文学の相互受容について検討しました。このように、研究内容と研究体制の双方にわたる国際性もはらんでいます。

徳永直の作品を研究し始めた当初は、異分野の研究者と共同研究をしたり研究発表や資料調査のために海外へ足を運ぶようになっていくことはまったく考えていませんでした。人見知りや語学音痴の私がここまでやってこれたのは、作家研究という〈個〉を軸としながら、その〈個〉から派生するさまざまな文学現象を明らかにしたいという欲望に従ってきたからです。私のように生い立ちに関係なく、不器用でもいいので、何か情熱を注ぐことができる研究対象をお持ちの方を特に歓迎します。ともに考えながら、研究を広げていきましょう。



リーズの街角にて(2017年、右=和田)

白地図に色を塗る

澤 藤 り か い

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

私の専門は自然人類学、生物考古学です。もう少し詳しく言うと、遺物などの古いものの生体分子（DNAやタンパク質）を調べる研究をしています。自分でも文系か理系かよく分かりませんが、考えてみたら私は昔からそんなことを目指して勉強と研究をしてきたのでした。高校の頃、理系か文系かを決める時にも、両方の分野に興味があり、ただ実験は高校や大学でないとできないから、という即物的な理由で理系を選択しました。大学に入ってから進学に悩み、文化人類学に興味が出てゼミをとったりしていたのですが、文系の学生たちの知識や議論のレベルに圧倒され、「私は文系に進んでもこのレベルにはなれない。それなら理系の方法で文化人類学にアプローチしよう」と考えてそのまま理系に進学しました。ただ当時はどうやってアプローチできるのかわからず、ひとまず人間の研究がしたいということで学部では生物学、大学院からは自然人類学を専攻していました。大学院では主に古人骨からのDNA分析を扱う研究室にいたのですが、過去の人の文化や病気にもっとアプローチできないかと思い、古人骨のタンパク質を調べたり、歯石や遺跡の土壌など、風変わりなものから過去のDNAを抽出して食べ物を調べたりしてきまし

た。生きている人を扱う文化人類学とは全く方向性が異なりますが、「理系の方法を用いて（過去の）人類の文化にアプローチする」という意味では、大学生の時に目指していたものに近づいてきたのかなと思います。

九州大学に来てから、他の先生や学生さん達と話す中で、「なぜ私は研究を続けているのだろう」とふと思う時があり、最近そのことをよく考えています。私の場合、何かを極めたいというより、世界をよく知りたい、なんでも知りたいという好奇心に駆られてここまで来てしまった、という気がします。学生の頃、海外に旅行に行って、実際に現地の人や物を見ることで、それまでぼんやりとしていたその土地の知識が、白地図に色を塗ったように生き生きとして感じられることがありました。文献やデータを調べて、自分の知識や世界の解像度が上がる、そういう瞬間が好きで、研究を続けているのかなと思います。自分の好奇心や興味の発散はコンプレックスでもあるのですが、それでもこの性質を受け入れて、健やかに楽しく研究と教育ができればいいなと思います。



サキタリ洞遺跡(沖縄県)での発掘風景

英国学士院国際会員 (International Fellow of the British Academy) に選出されました！

溝 口 孝 司

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

僕は最初、タイトルだけを一瞥してそのメールをspamだと思い、放置した。数日後、なぜか気になってそれを開くと、Confidential: Elections to the British Academy (International Fellowship) というそのメールには、下記からはじまる文章とChief ExecutiveのHetan Shah氏のサイン、そして、見たことのあるロゴがあった：

Dear Professor Mizoguchi

It is my honour and privilege to inform you that the Council of the British Academy has resolved to propose you for election as an International Fellow at the Annual General Meeting on 17 July 2024. Election to the International Fellowship is the highest honour that the Academy confers on non-UK residents in recognition of scholarly distinction in the humanities and social sciences.

僕は一瞬ポカンとして、外を眺めた。6月の、何の変哲もない美しい日。そうか、英国学士院の国際会員になったのか。

何の変哲もない、からの流れで、大学のプレス・リリースを引用したい。

「このたび、本学比較社会文化研究院・溝口孝司教授（アジア埋蔵文化財研究センター長、地球社会統合科学府担当、共創学部担当）が、7月17日、英国学士院の国際会員に選出されました。日本からは10年ぶり9人目の選出です。英国学士院 (The British Academy) は、1902年設立の人文科学ならびに社会科学分野における国立アカデミーです。The Royal Society (王立協会) が自然科学分野をその対象とするのに対し、英国学士院は人文社会科学を対象とする団体です。英国学士院のフェロシップとなりうるのは人文社会科学において際だった業績を挙げた、英国における各分野の代表的な研究者に限られており、その称号 (ポスト・ノミナル・レターズ) であるFBA (Fellow of the British Academy) の使用を許されることは、研究者としての最高の名誉の一つとなっています。また、国際会員 (インターナショナル・フェロシップ) への選出は、人文科学および社会科学における学術的な卓越性が認められ、英国以外の居住者に英国学士院が授与する最高の栄誉であり、クロード・レヴィ＝

ストロース (人類学)、ユルゲン・ハーバーマス (社会学)、フェルナン・ブローデル (歴史学)、丸山真男 (政治学) など、過去の会員には世界最高峰の知識人が名を連ねています。」

「溝口孝司教授のコメント このたびの選出には大変驚きますとともに、これまで続けてきた<社会考古学>発展への努力がこの様な形で国際的認知と評価をいただきましたことを大変うれしく名誉に思っております。この名誉は九州大学考古学の伝統、また日本考古学の発展の歴史に基づくものであり、今後とも自らの内に根ざすローカルな蓄積を大切にしつつ、グローバルな貢献を続けてゆく所存です。」

「<参考>これまでの日本での国際会員●高楠順次郎氏 (東京帝国大学 仏教学 1936年選出 (以下同)) ●辻直四郎氏 (東京大学 言語学 1971年) ●服部四郎氏 (東京大学 言語学 1976年) ●丸山真男氏 (東京大学 政治学 1982年) ●秋山光和氏 (東京大学 美術史学 1988年) ●細谷千博氏 (一橋大学 国際政治学 1995年) ●佐々木毅氏 (東京大学 政治学 2004年) ●吉田豊氏 (京都大学 言語学 2014年) * 森嶋通夫氏 (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス 経済学 フェロシップ 1981年)」

何の変哲もない初夏の日に、さまざまな想いが去来したのも、今、何の変哲もないことだったように感じる。1988年から1994年までのケンブリッジ大学での日々、徹底的に打ちのめされて、少しずつ新しい自分を作ってゆく中で、【情報提供者・理論消費者ではなく、理論開発者・提供者になる】、【ケンブリッジ大学出版局やラウトレッジから専門単著をできる限り数多く出版する】

(付け加えれば、どちらにも「絶対!」が末尾につく) という (いかにもポストコロナな) 痛々しい誓いを立てて、ここまでやってきたのだった。

それは、何の変哲もない種類の、長く困難な道のりでした。これからも頑張ります！



Admission Ceremonyにて

伊波普猷賞を受賞して

木 土 博 成

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

(比較社会文化研究院)

このたび、拙著『近世日琉関係の形成－附庸と異国のはざま』(名古屋大学出版会、2023年12月)に対し、第52回(2024年度)伊波普猷賞を受けました。

伊波普猷賞は沖縄学の父といわれる伊波普猷(1876～1947)の業績を顕彰し、伊波に続く沖縄の文化振興と学術の発展に寄与する研究や著書に贈られるものです。賞の主催は沖縄タイムス社で、受賞者インタビューなどの特集記事は、2025年2月8日(土)付の沖縄タイムス朝刊に掲載されました。

受賞のお知らせを頂戴したときは、たいへん驚きました。「このような栄誉ある賞を私がいただけるなんて、びっくりです」というのは受賞者の常套句であり、また私の偽らざる思いでもあります。それだけではありません。というのも、自分は日琉関係史の研究をしてはいますが、薩摩藩に軸足を置いた研究者だと思っていたからです。沖縄の伊波普猷という大家の名を冠した賞は、これまで、もっと琉球・沖縄に軸足を置いた研究が対象とされていたように思います。そのため、受賞はとても意外な気がしたのです。

ときどき、福岡や関西で市民講座に呼んでいただく機会があり、薩摩藩の立場に即して琉球の歴史に言及することがありますが、だいたい三回に一回ぐらいは、質疑応答の時間や講演後に詰め寄られ、「薩摩側から見るとはけしからん!琉球の歴史を無視するのか」と怒鳴られる経験をしてきました。琉球の歴史を薩摩藩側の史料から見る、というのは、やはり一面的だと自分でも思います。ただ、たとえば1940～50年代の日本の歴史を考える上で、アメリカ側の史料・視点が有用であるように、琉球という存在を薩摩側から見てみるということも、それはそれで重要なはずです。

要するに、残された史料の性質を考え、そこからどういうことが言えず、したがってどういうことが言えるかを表すのが歴史研究の基本であり、醍醐味なのです。これだけ近年、琉球を主語にした琉球史が盛んになっているからこそ、「敵役」の薩摩藩の琉球支配史を更新していく必要がある、と思って研究してきたので、そうした点を評価していただけたとしたら、とても嬉しいです。

さて、単著を出したら、念願の泡盛の甕を買っていいよ、というのが我が家の約束事でした。わたしは「瑞泉」という銘柄の甕が欲しかったのですが、妻の強い意向に根負けし、ついには識名酒造の「時雨」の壺を買いました。「瑞泉の甕」から「時雨の壺」へ、というのは、私の個人史にとっては重大な一齣です。今後もし、もう一冊書くことができれば、次こそは再チャレンジを、と企んでいます。もちろん、「時雨」も気に入っており、コンパの際などには、先生方や院生さんに、自慢の壺から振る舞うのを、密かな楽しみにしています。



2025年2月12日(水)パシフィックホテル沖縄で行われた贈呈式の様子、前列真ん中が筆者



受賞作

第22回(2023年次)農学会 日本農学進歩賞

松尾和典

(地球社会統合科学府 包括的生物環境科学コース)

この度、公益財団法人農学会の表彰の1つ、日本農学進歩賞(研究タイトル:害虫防除における有用天敵の探索と利用に関する研究)を受賞しました。授賞式および受賞者講演会は、2023年11月24日に東京大学弥生講堂一条ホールにおいて開催されました。同賞は、40歳未満の研究者を対象としており、農学系学協会等の長からの推薦によって応募となる賞です。農学系とあって、生物学はもちろんのこと、農業土木(いわゆる工学系)や農業経済(いわゆる経済学系)など、幅広い研究分野から応募が集まる賞となっています。第22回の同賞受賞者は11名でしたが、森林科学、畜産科学、作物学、遺伝学、物性科学、画像工学、数学、昆虫学等、多様な専門分野から受賞者が出ました(図1、2)。

研究概要は本誌48巻(2023年3月出版)で掲載されましたので、本稿では、研究対象として扱っている寄生蜂について、その生き方をご紹介します。

寄生蜂は文字どおり寄生するハチの総称です。メス成虫は、他の虫に自らの卵を産み付け、ふ化した子孫は、その昆虫を餌として成長します。寄生性の生活とあって、体は小さく、ほとんどが1mm程度、大きいても5mmほどです。見た目もミツバチやスズメバチ等とは違い、金属光沢を持つ種が大多数です(図3)。これがもっと大きく、せめて1cmくらいになっていたら、昆虫少年の眼差しが寄生蜂に向いていたに違いありません。今のところは写真愛好家の方々が、撮影技術の腕試しに、1mmほどのキラキラした寄生蜂の写真を撮影してSNS等で紹介する場面が多いようです。

図3の寄生蜂は本州で発見されたオナガコバチ科の1種で、*Torymus aciculatus*という種のメス成虫です。この蜂は、タマバエ類(植物体内に潜って生活する)に寄生するという性質を持っています。まず、触角で植物体表をトントンと叩き、その感触で植物内部に産卵対象のタマバエ幼虫がいるかどうかを確かめます。次に、腹部末端から飛び出した長い産卵管を使って、植物組織を貫き、卵を産み付けるのです。この穿孔作業は30分以上かかる場合もあり、メス成虫にとってはもちろん大仕事で、私にとっても椅子の設置をしつつ、その健闘を見届ける気長な観察調査になります。



図1 授賞式前に撮影した集合写真。当日オンライン参加の2名を含め、11名が受賞となった。



図2 授賞式後の懇親会にて撮影。推薦下さった一般社団法人日本応用動物昆虫学会の理事の皆様との集合写真。無事に講演が終わり、ほっとした。



図3 *Torymus aciculatus*のメス成虫。体長は約2mmで、体長とほぼ同じ長さの産卵管を持っている。

第29回日本比較文学会賞 受賞報告

大場 健 司

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース修了)

(九州女子大学人間科学部心理・文化学科 専任講師)

拙著『1960s 失踪するアメリカ——安部公房とポール・オースターの比較文学的批評』（春風社、2022年12月、ISBN：9784861108518）が評価され、「第29回日本比較文学会賞」を受賞いたしました。学会賞授与式は、日本比較文学会第86回全国大会（於・愛知学院大学、2024年6月8日）にて開催されました。

拙著は、九州大学に提出した博士論文に加筆・修正を行なったものです。在学中は指導教官の波瀾剛先生をはじめ、松本常彦先生、西野常夫先生に大変お世話になりました。また、本書執筆は、妻の頼怡真、長男の由寛、長女の結月の支えがあったからこそできたのだと思います。

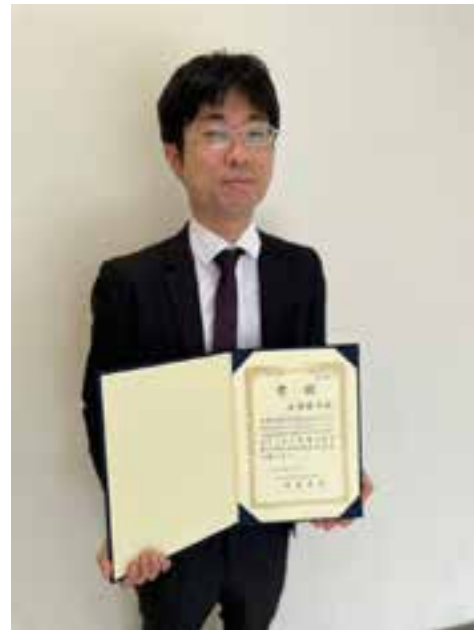
本書は、日本のアヴァンギャルド (Avantgarde) 作家、安部公房 (1924-1993) と現代アメリカのポストモダン (Postmodern) 作家、ポール・オースター (Paul Auster, 1947-2024) の小説やエッセイを比較文学・比較文化的に吟味したものです。

本書の目的、それはポストモダン後に安部公房の実存主義 (Existentialism) をアナキズム (Anarchism) として再評価することです。ポストモダンが流行して以降、「理念」や「大きな物語」を語ることは嘲笑されてきました。しかしながら、新自由主義 (Neoliberalism) の拡大とともに、「国家」と「資本」が引き起こす様々な問題——貧富の格差、階級の分断、疎外された労働、覇権国家アメリカの国際秩序のもとでの戦争、地球の生態系の破壊——はとどまるところを知りません。そこで現代思想において評価されてきたのが、D・グレーバー (David Graeber, 1961-2020) や柄谷行人 (1941-) に代表される現代のアナキズムです。この水脈に、安部やオースターのテキストを位置付けること。ここに本書の批評性があると言ってもよいでしょう。

また、比較文学的には次の点を論じています。①安部の小説の英語訳がアメリカでポストモダンな文脈で読まれてきたこと、②安部からオースターへの明瞭な継承関係があること、③安部が自身のアナキズムをJ・P・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) の実存主義や同時代のアメリカ文学を媒介にして形成したこと。

ポストモダンを批判的に超え、マルクス主義 (Marxism) には還元され得ない「自由」かつ「平等」なアソシエーション (Association) の可能性を提示した点で、本書は私の研究の

集大成とも言えるものです。ご興味のある方はぜひご覧ください。



(図1) 学会賞の賞状を持って



(図2) 拙著表紙

九州考古学会奨励賞 受賞報告

足 達 悠 紀

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

私はこの度、九州考古学会において第17回九州考古学会奨励賞を受賞いたしました。受賞の対象となった拙稿は、九州考古学会の機関誌『九州考古学』第97号(2022年刊行)に掲載された「6・7世紀の須恵器編年考-北部九州を対象として-」です。

本論文は、地球社会統合科学府に提出した修士論文「律令国家形成期における須恵器生産体制-6世紀後半から8世紀初頭にかけての北部九州の諸窯跡を対象に-」の一部を加筆・修正したものです。修士論文の執筆・論文の投稿にあたっては、指導教員である溝口孝司先生、小山内康人先生、辻田淳一郎先生、田尻義了先生、中野伸彦先生をはじめとして、隣接諸分野の先生方から貴重なご指導を賜りました。また資料調査に際しては、関係諸機関の皆さまに便宜を図っていただき、多大なるご協力をいただきました。先生方や諸機関の皆さまに、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

私はこれまで、律令国家形成期・成立期(6世紀から8世紀)の須恵器生産体制を明らかにすることを目的とし、地方に所在する須恵器窯の操業期間や、各窯で生産された製品の内容・形態の比較検討を進めてきました。

須恵器は汎列島の生産され、基本的な器種や形態が全国的に類似する斉一性を持つ一方で、各地域では形態の微細な地域性や生産器種の差異が生じていることが指摘されています。特に7世紀には、食膳具において金属器志向の様式変化が始まり、7世紀第4四半期には「律令的土器様式」と呼ばれる、台付・平底の食膳具や箸・匙を用いた大陸風の食事様式へ転換します。このような劇的な変化は全国的にみられますが、実際には一様に変化するのではなく、古墳時代的な器種を残しつつ新しい器種が導入されるというように、新旧入り混じって複雑に変容していきます。しかし、こうした変容の具体的な様相については、十分に明らかになっているとは言い難い現状でした。

拙稿では、北部九州に所在する窯から出土した須恵器を対象に、各部位の形態変化に焦点を当て、窯跡群ごとの須恵器の変遷過程を整理しました。その結果、基本的にはいずれの窯跡群でも共通した変遷を辿るものの、古い器種や形態を残す窯跡群があることや、窯跡群内で独自の形態変化がみられる場合があることを分析的に確認することができました。また、こうした製

品の差異は、最新の器種や器形に関する情報・技術伝達や、器種や形態にみられる在地の伝統の保守性に由来することを指摘しました。

授賞式の後には、先生方や研究者の皆さまから、方法論的問題点や今後の展望について様々なご助言を賜りました。同時に、たくさんの激励のお言葉を頂戴し、大変励みになりました。

拙稿の執筆にあたっては、何度も「書けない」と机に突っ伏し、何度ももう諦めようと思いました。本当に意義のある内容だろうかと自問自答し、目に涙を溜めながらイースト1号館6階を歩き回ったこともありました。須恵器をテーマにした論文は数多く、私が行った分析手法は考古学の伝統的な方法で、自身の研究の新規性や独創性に疑念を抱いていたからです。自分の研究に意義が見いだせません、と泣きながら主指導教員である溝口孝司先生に相談しに行った時、「もっと自信を持って、シンセサイザーとしてのエリートを目指しなさい」と激励いただきました。

(横文字の咀嚼に少し時間がかかりましたが)巨人の肩の高さに足がすくんで座り込んでいたのだと気が付き、重い腰を少しだけ浮かせることができました。多くの課題を抱えたまま未熟な論文を投稿してしまったと、幾度となく後悔をしていますが、奨励賞という形で評価していただけたことに改めて感謝申し上げます。今回の受賞を励みに、今後も研究を進めていきたいと思えます。



受賞記念品の置き時計(裏面)

英語コーパス学会 学生新人優秀発表賞を受賞して

前 田 裕 司

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

2024年10月5日、6日に青山学院大学にて開催された英語コーパス学会第50回大会にて、学生新人優秀発表賞を受賞することができました。

英語コーパス学会は1997年に創設され、英語コーパス、およびコーパスツールの開発・評価・利用に関わる研究、また、英語コーパスを用いた言語研究・言語教育研究・関連研究を促進することを目的として活動しています。会員数は300を超え、日本におけるコーパス研究の代表的な学会です。本学会は年に1度大会を開催しており、今回受賞した学生新人優秀発表賞は、大会で発表を行った学生及び新たに一般会員となった者を対象に、英語コーパス研究の奨励を目的として授与されるもので、今年度新たに制定されたものです。私自身、今回が初参加であったにもかかわらず、このような榮譽ある賞をいただけたことを大変光栄に思います。受賞者の発表の際に、自分が受賞するとは微塵も想定していなかったのが、本当に驚きましたし、今でも何かの間違いでは?とと思っているほどです。

今回私は「同一学習者の技能間における産出結果の違い—スピーキングとライティングの比較から—」というテーマで発表を行いました。同一学習者からスピーキングとライティングデータを収集した学習者コーパスは、利用可能なものが非常に限られています。そこで本研究では、私の地元でもある宮崎県の高校に通う高校1年生52名に研究協力を依頼し、スピーキングとライティングの産出データを取得し、ミニ学習者コーパスを構築しました。そして構築した学習者コーパスのデータを使用し、同一学習者によるスピーキングとライティングという技能間で、産出結果にどのような違いがあるか分析を行いました。スピーキングとライティングはどちらも産出技能ですので、基本的には同じような英文が産出されることが予想されます。しかしながら今回の研究で、それぞれのデータをテキスト的特徴を示す指標から分析すると、この2技能間で産出される英語には、統計的にも有意差があることが明らかになりました。

受賞後、審査を担当された先生方から「質疑応答の対応が良く、質問に対する回答が明確で建設的な議論ができていた」とのお言葉をいただきました。発表内容そのものは簡潔でありながらも、研究の意義やデータ分析の結果、今後の展望について十分に議論できた点が評価につながったのだと考えます。この

点については、今後の研究生活においても指針としたいと思います。

今回英語コーパス学会で行った発表は、修士論文の一部で、メインの研究テーマは英語スピーキングのAIによる自動評価の有効性です。昨今の英語教育では、パフォーマンステストや観点別評価を行うことが求められており、教員への負担が非常に大きくなっているという課題があります。研究を通して、そういった課題を解決していきたいと考えています。

個人的な話になりますが、私は社会人学生で、約10年ぶりに学生となりました。慣れない学生生活、仕事との両立、そして毎週県外からの通学は、非常にタフなものでした。実際、今回の発表で提出すべきProceedingの締切が海外出張と重なり、遠いアフリカの地でホテルに籠り、朝から夜遅くまでパソコンに向かったことを思い出します。しかしながら、そうした苦勞も、今回賞をいただいたことで報われたと感じている次第です。

最後にこの場をお借りして、日頃からご指導いただいている内田諭先生、および学生生活を支えてくれた家族、研究室の皆さん、また関係する皆様に感謝申し上げます。今回受賞した賞に恥じぬよう、今後もさらに質の高い研究に励んでいきたいと思えます。



(左)内田 諭 准教授、(右)筆者

第21回徳川奨励賞 受賞

丸山大輝

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

2023年12月、公益財団法人・徳川記念財団より第21回徳川奨励賞をいただきました。徳川奨励賞は、徳川記念財団が、日本近世史およびその関連研究に携わる若手の研究者に奨励金を授与し、その研究を援助することを目的としたものです。2024年11月10日(日)に学士会館(東京都千代田区)で開催された第22回徳川賞授与式には、奨励賞受賞者として出席しました。

受賞した研究テーマは「鷹狩の環境史的研究—近世北部九州を中心に—」です。鷹狩は鷹をつかって鳥などの獲物を捕らえる狩猟方法です。鷹狩は古代から権力と結びつきながら連綿と続けられ、江戸時代に入ると將軍や大名をはじめとする武士の特権となりました。また、鷹そのものや鷹狩の獲物は贈答品として珍重されました。特に、徳川將軍家から「御鷹」や「御鷹の鳥」を拝領することは大名家にとっての名誉でした。このように、贈答品としての鷹や獲物を維持するためにも領主は鷹を維持する必要がありました。

さらに、環境の視点から鷹狩をみてみると、古代・中世の鷹狩では野生のタカの習性をいかしてキジやウズラなどを捕獲したのに対し、近世になると人為的な調教を施すことにより大型の冬鳥(ツルやハクチョウなど)を安定的に捕獲できるようになりました。このように、近世の鷹狩で珍重されるようになった渡り鳥を確保するには飛来地の環境を整える必要があります。そこで、領主は平野部を中心とした広大な禁猟区=鷹場を設置しました。鷹場の設置により、人間と鷹を頂点とする生態系が成立し、この生態系は幕末維新时期にいたるまで維持され続けました。

一方、このような鷹狩の問題を考えるうえで、地域社会が受けた負担の側面をおさえておく必要があります。鷹を維持するためには鷹の餌を維持する必要があり、そのために実施された餌の徴収や餌を捕獲するために役人が村にやってくることは地域社会にとって大きな負担でした。また、鷹場に指定された村々では住民による狩猟や漁撈のほか、鉄砲の使用が制限されました。その影響により、地域社会では鳥獣害問題が慢性化・深刻化するなど、農業を基盤とする社会とは相反するような現象が生じる事態にもなりました。

以上のように、近世の鷹狩は武家社会のみならず、地域社会や環境、生態系にも影響を与えた事象でした。そこで、私は環境史というアプローチから鷹狩の研究を進めています。近年、歴史

学では環境問題や気候変動への関心の高まりとともに人と自然の関係史を対象とする「環境史」と呼ばれる研究分野が盛んになりつつあります。近世の鷹狩をめぐる先行研究では早くから環境の視点は意識されていたものの、個別研究の枠内で議論が完結し、環境史研究のなかに鷹狩が明確に位置づけられていませんでした。そこで、本研究では鷹狩を環境史研究の動向に位置づけることを課題とし、その解決のために次の二つのポイントに気をつけています。

一つ目のポイントは、生き物と生き物のつながり、食物連鎖や生態系の視点から鷹狩を分析することです。鷹狩には人間と鷹のみならず、獲物や鷹の餌といった様々な生き物が関係します。そうした生き物同士の関係をふまえ、人間中心的な環境論に陥らないようにしています。

二つ目に、鷹場と自然環境・地域社会との関係です。前述のように、近世の鷹狩を維持するためには鷹場という空間が必要でした。地域社会による負担の側面もふまえながら鷹場と自然環境の相互関係を描くようにしています。

今回の受賞を励みに、博士論文の提出に向け一層の精進を重ねる所存です。最後に、日頃からご指導をいただいている福田千鶴先生、ゼミ等でご指導・ご助言をいただいている先生方へ心より感謝を申し上げます。



第22回徳川賞授与式の記念写真

現代韓国朝鮮学会「小此木賞」を受賞して

山口 祐 香

(地球社会統合科学府 博士後期課程修了生)

(日本学術振興会特別研究員 PD)

2024年10月、所属する現代韓国朝鮮学会の今年度の学会賞（「小此木賞」/著書の部）を受賞しました。受賞作品となった単著『発見された朝鮮通信使—在日朝鮮人歴史家・辛基秀の歴史実践と戦後日本』（2024年3月、法律文化社）は、私が2021年3月に地球社会統合科学府に提出した博士論文を基にしたということもあり、修了生として受賞の報告を記させて頂きたいと思っています。

近世の朝鮮と日本を往来した「朝鮮通信使」は、鎖国下の江戸時代における国際交流を示す歴史として学校でも教えられています。ただし、もし朝鮮通信使の研究書として私の本を手にとられる方がおられれば、「戦後日本」の社会に焦点を当てたはしがきに戸惑われるかも知れません。なぜなら、この本は、朝鮮の歴史ではなく、朝鮮通信使の歴史を「発見」した人々の「戦後史」に焦点を当てているからです。

かつて約200年間に渡り日本と朝鮮の外交関係に寄与した朝鮮通信使の存在は、近代以降一般には忘れられ、また日本による朝鮮半島の植民地支配が進められる中で、朝貢使節団であったかのような歴史記述がされてきました。そうした朝鮮通信使の歴史に対し、「善隣友好」を基軸とするいわゆる「文化交流使節団」の側面を強調しながら、日朝関係史の明るい側面を取り上げようとしたのが、1970年代以降の在日朝鮮人歴史家たちでした。彼らは、日本人研究者や市民運動関係者、自治体関係者などとも協力しながら、本や雑誌媒体、映画、まつり、資料館など、様々な機会を通じて朝鮮通信使の歴史を積極的に発信しました。本書はその中でも、関西を拠点とした在日2世の映像作家であり、著名な朝鮮通信使研究者であった辛基秀（シン・ギス／1931-2001）の活動を中心に、彼と関わりを持った多くの在日朝鮮人・日本人の存在にも触れながら、人々がなぜ・いかにして「朝鮮通信使」の歴史に向き合うに至ったかという過程を取り上げています。

本書の出発点をさかのぼれば、2018年に地球社会統合科学府に提出した修士論文に至ります。元々日韓関係に関心を持っていた私は、修士課程で朝鮮通信使の歴史顕彰事業を通じた対馬と釜山の自治体間交流を、普通の人々が歴史と関わる多様な行為を捉えた「歴史実践」の事例として研究しました。その際、インタビューなどで出会った人々のお話から、彼らの活動の

きっかけをもたらしたという在日朝鮮人歴史家たちの存在に関心が広がり、博士論文のテーマとして掘り下げていくことになりました。途中、コロナ禍で思うように調査やインタビューが出来ない時期もありましたが、学振PDとして拠点を（辛基秀の母校でもある）神戸大学に移したことは、関西での史料調査を可能にし、博論を単著として大幅に改稿をしていく上で非常にプラスとなりました。特に、研究者や編集者、インタビュー対象者の方々から頂いた助言を踏まえ、本書の射程を単純な在日朝鮮人史だけでなく、戦後日本の社会・市民運動・メディア・日韓関係などの多角的な側面を含めた同時代史として据え直すことが出来ました。課題も多く残した単著ではありますが、目標としてきた「在日朝鮮人史のいる戦後日本史」「日本人のいる戦後在日朝鮮人史」が少しでも描けていればと思っています。

さて、今回賞を頂いた現代韓国朝鮮学会は、その名が冠するように、朝鮮半島をめぐる現代の政治・経済・社会に関する多分野の研究者が所属する学会です。例年、政治学の著作の受賞が多い中で、今年度は私の著書と、郭曼錫さんの大著『自己否定する主体 一九三〇年代「日本」と「朝鮮」の思想的媒介』（2024年3月、京都大学学術出版会）がW受賞となりました。日韓国交正常化60周年を迎える中で、国家間関係に限らない多様な主体の視点から、最も近い隣国である日本と朝鮮半島のこれまでを振り返り、跡付けていく歴史研究の必要性は近年一層高まっています。過分な賞を頂きましたが、そうした研究の一端をほんの少しでも担うべく、今後更に精進を重ねていきたいと考えています。最後に、本書に至る研究生生活をご指導頂いた学府の松井康浩先生、鬼丸武士先生、三隅一人先生、波瀾剛先生に御礼申し上げます。



頂いた小此木賞表彰状(筆者撮影)

『新しい政治改革へ』の道案内

岡 崎 晴 輝

(地球社会統合科学府 国際協調・安全構築コース)
(法学研究院)

昨年、『新しい政治改革へ——国会を市民の手に取り戻す』(法政大学出版局、2024年9月)という書籍を公刊しました。過去15年間に取り組んできた選挙制度研究をまとめたものです。本書の内容を一言でいえば、衆議院の選挙制度を多数派優遇式比例代表制(併用制)に改革するとともに、選挙制の参議院を抽選制の市民院に改組するというものです。専門家以外にも読めるように配慮しましたが、基本的には専門家に向けて書かれた学術書であるため、本書を読み通すのは容易ではないはずです。そこで、本書を読むためのポイントを記しておくことにします。

* * * * *

本書を読む際に押さえてほしいポイントは以下の四つであり、そのうち最も重要なのは三番目です。

第一に、国会会議録等を分析し、衆議院の小選挙区比例代表並立制の主たる思想的基礎が政権選択論であり、従たる思想的基礎が民意反映論であることを明らかにしました。国会会議録などを読み込むと、「政権交代」ではなく「政権選択」という概念が並立制の導入に決定的な役割を果たしたことが分

ります。政権選択論とは、比例代表制では総選挙後に連立交渉が生じ、有権者の手の届かないところで首相・与党・政策が決まってしまうが、小選挙区制では有権者が総選挙を通じて首相・与党・政策を選択することができるため、比例代表制よりも小選挙区制のほうが望ましいとする理論です。並立制を導入する際、この政権選択論が決定的な役割を果たしたことを明らかにしたことが、第一のポイントです(第1章・第2章)。

第二に、並立制が自民党=公明党の一連合優位政党制をもたらし、政権選択も民意反映も困難になっていることを明らかにしました。現代日本の政党システムは「一強多弱」と呼ばれることも多いのですが、政党システム論にない概念であり、政党システム論にうまく収まりません。そこで私は、一党優位政党制の変種としての一連合優位政党制という概念を提示し、現代日本の政党システムが自民党=公明党の一連合優位政党制であると概念規定しました。そして、「政治改革」の意図とは裏腹に、政権選択も民意反映も困難になっていると分析しました。一連合優位政党制とその機能不全を明らかにしたことが、第二のポイントです(第3章)。

第三に、政権選択可能な小選挙区制/民意反映可能な比例代表制という二者択一的枠組みを批判し、多数派優遇式比例代表制であれば政権選択と民意反映を両立させることができることを明らかにしました。多数派優遇式比例代表制は基本的には比例代表制ですが、第一位の政党連合等に55%の議席を配分し、それ以外の政党連合等には45%の議席を配分する仕組みが組み込まれています。この多数派優遇を除けば、得票数に比例して各政党に議席を配分します。こうすれば、政党には政党連合を組むインセンティブが生じ、中道右派連合と中道左派連合が成立しやすくなります。そうなれば、有権者は総選挙を通じて政権を選択できると同時に、衆議院の政党構成に民意を反映させることもできます。政権選択と民意反映を両立させる選挙制度があることを示したことが、第三の、そして最も重要なポイントです(第4章~第6章)。

最後に、単に抽選制の市民院を提唱しただけでなく、多数派優遇式比例代表制の衆議院と抽選制の市民院の相乗効果を示しました。選挙制の参議院を抽選制の市民院に改組し、法案拒否権などを付与します。そうすると、市民院議員を説得できない

と法案を成立させることができないわけですから、衆議院の審議が活性化します。野党も俄然やる気がでますし、与党もうかうかしていらなくなります。また、市民院議員を説得しなければならぬわけですから、衆議院の審議が分かりやすくなることも期待できます。他方、衆議院の選挙制度を55%と45%の多数派優遇式比例代表制にすれば、与野党が比較的対等に競争する条件が整い、市民院議員が与野党の言い分の是非を判断しやすくなります。選挙制の衆議院と抽選制の市民院の相乗効果を明らかにしたことが、第四のポイントです（第7章）。

本書を丁寧に読んでいただければ、これ以外にも様々な新しい知見を見出すことができるはずですが、以上の四つのポイントを手掛かりにして、本書を読み進めていただければ幸いです。

* * * * *

ところで、本書が公刊された直後、2024年総選挙が実施されました。ご承知のように、2024年総選挙では、自民党、特に安倍派の国会議員を中心に、政治資金収支報告書への不記載問題が発生し、自民党の総裁は石破茂、立憲民主党の代表は野田佳彦に交代し、総選挙を迎えました。そして総選挙の結果、自民党=公明党が過半数割れを起こす一方で、立憲民主党、国民民主党、れいわ新選組などが躍進しました。このことは、自民党=公明党の一連合優位政党制が崩壊したのではないか、という疑問を生じさせるはずですが。本書で提示した一連合優位政党制とその機能不全という現状分析は、修正されなければならないのでしょうか。

たしかに、自民党=公明党が衆議院で過半数割れを起こした結果、衆議院の審議にも変化が見られます。しかし私は、自民党=公明党の一連合優位政党制が崩壊したとは考えません。第一に、自民党=公明党は、過半数割れを起こしても政権の座に留まり続けています。過半数割れを起こしても政権の座に留まり続けられるほど、自民党=公明党の一連合優位政党制は強固であると解釈すべきではないでしょうか。第二に、参議院においては、依然として自民党=公明党が過半数の議席を占めています。第三に、政党支持率では自民党が他の政党を大きく引き離しています。これらを踏まえると、自民党=公明党の一連合優位政党制は崩壊していないというのが、私の判断です。

ここから先は予想になりますが、石破内閣は衆議院における過半数を回復するために、十中八九、しかるべきタイミングで解散・総選挙に踏み切るはずですが。事実、石破首相は2025年夏の衆参同日選挙もありうると語っています。与党に都合のよいタイミングで解散・総選挙に持ち込むことができること、野党共闘が容易に成立しないであろうことを考えれば、自民党=公明党が

過半数の議席を回復する可能性が高いように思います。そうなれば、自民党=公明党の一連合優位政党制が持続することになり、一連合優位政党制とその機能不全という現状分析を変更する必要はないことになります。

* * * * *

以上が『新しい政治改革へ』への道案内です。決して平易な本ではないはずですが、選挙制度と政党政治の在り方は、すべての市民の生活に大きな影響を及ぼします。専門家だけでなく、それ以外の方々にも読んでいただければ、とても嬉しく思います。価格も、九州大学大学院法学研究院の国際学術交流振興基金から助成金をいただくことができたため、学術書としては入手しやすい価格(2,700円+税)に抑えられています。なお、カバー絵は、水彩画家の春崎幹太先生に描いていただきました。制作過程は春崎先生のYouTubeで公開されていますので、こちらもぜひご覧ください。



『データを用いたことばとコミュニケーション研究の手法』

大 津 隆 広 (編)

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)
(言語文化研究院)

2023年10月、ひつじ書房より『データを用いたことばとコミュニケーション研究の手法』という言語研究の論文集を出版しました。データを用いた分析手法は現在の言語研究の主流であり、ことばやコミュニケーションの諸相を正しく分析するためには研究目的に合致したデータの利用が必要です。その量的分析や質的分析を通して、言語学的事実やパフォーマンスの実態、教育的知見が得られることもあれば、ことばやコミュニケーションに関する仮説が確認されることもあります。近年、年代やジャンル別に電子化されたテキスト、音声、映像などのさまざまな種類のコーパス、さらには品詞や文構造、韻律などの注釈付きのコーパスやパラレルコーパスなども利用されています。研究テーマ×データ×理論×分析により、言語研究は多種多様なものへと進展します。

本書は、そうした多種多様な言語研究の手法を具体的に提示することを目的としています。九州大学には多くの言語学研究者がいますが、人文科学研究院、言語文化研究院、芸術工学研究院、工学研究院、基幹教育院に所属する(あるいはかつて所属した)12名のデータを用いた言語研究を行う研究者を集め、11

編の論考としてまとめました。この中には、本学府の言語・メディア・コミュニケーションコースにかつて所属していた松村瑞子氏、山村ひろみ氏、劉巖氏、横森大輔氏、現在所属している内田諭氏、土屋智行氏、そして私も含まれています。

集められた11編は、語彙や構文、会話と語り・文法形式、会話表現や談話標識、文法化や言語接触、話し手と聞き手の相互行為的側面など、ことばやコミュニケーションのさまざまなトピックに関するものです。こうしたトピックに対して、書き言葉や話し言葉、あるいは韻律を含めたコーパス、映像・音声などのマルチモーダルコーパス、自主構築コーパスなどのデータが用いられています。データを用いた言語研究の手法を具体的に提示するための工夫として、11編の論考を研究テーマ別に大まかに分類したのち、各論考の冒頭で研究の概要とキーワードを示し、研究の意義や研究方法、使用したデータのタイプや内容の説明を加えています。

多彩な論考の寄稿依頼から1冊に編集する作業は予想以上に時間のかかるものでした。全編を通して索引をつける最終段階では、専門外の分野もあるために執筆者への確認を何度となく繰り返し、締め切り間際によりやく入稿できた時は肩の荷が下りた気分でした。本書はデータを用いたことばとコミュニケーション研究の専門書ですが、関連する言語研究を始めたばかりの学部生や大学院生にとって研究手法を学ぶ手引書となることも願っています。

近代チベット政治外交史

— 清朝崩壊にともなう政治的地位と境界 —

[第46回サントリー学芸賞(思想・歴史部門)受賞]

小林 亮 介

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本コース)



日本で暮らす多くの人々にとって、同じ「アジア」とはいえ、遙か遠くのチベットの歴史に関心を向ける機会はほとんど無いかもしれない。しかし、18世紀頃までのチベットは、広大なユーラシア大陸東部の歴史を動かす重要なアクターであった。チベットで発展を遂げたチベット仏教が、ヒマラヤ・チベットのみならず、モンゴルやマンチュリア、さらに北京にまで拡大したという、輝かしい一面があったからである。清の乾隆帝がチベット仏教に傾倒していたことも、清朝史研究の分野ではよく知られている。

それに比べて、本書が対象とする19世紀後半以降のチベットの歴史は、これまで日本のアジア史研究のなかで正面から取り上げられることはほとんどなかった。その内部で何が起きていたのかはあまり論じられないまま、チベットの歴史は、イギリス・ロシア・中国の競合関係のはざままで翻弄され、その後、中華人民共和国の一部として併合される、というストーリーで描かれる傾向にあった。また、中国の学界でも、同時期のチベット史は、歴

代中国政権の国名を冠した「清代」「中華民国期」「中華人民共和國期」という時代区分や枠組みのなかで論じられることが多く、チベット自身の主体性は等閑視されがちであった。

しかし、チベット本土の動向に目を向けてみると、本書が扱った中央チベットのダライ・ラマ政権(1642-1959)は、政教一致の政体として成立して以来、実に300年以上も広大な支配領域を維持して存続し、中国の清朝(1636-1912)よりも、また大陸時代の中華民国(1912-1949)よりも長生きした、強い生命力を持つ政権だったことに気付かされる。本書は、近代世界のなかで多くの課題に直面しながらも存続した、ダライ・ラマ政権の持っていたその強靱さに留意しつつ、清朝崩壊前後を貫く、19世紀後半から20世紀前半にかけてのチベットの政治外交史を、同時代のアジア史のなか位置づけて描こうとしたものである。

では、かくも強固に権力基盤を維持したダライ・ラマ政権は、19世紀後半以降、「主権」「領土」「国際法」をはじめとする西洋由来の概念・思想・制度がアジアの在来秩序を圧倒していくなかで、どのようにこれに対応してきたのであろうか。こうした類のテーマは、ほかのアジア諸地域の歴史、例えば日本近代史や中国近代史の分野では当然のごとく検討されてきた課題ばかりであるが、チベットでは正面から問われることはほとんどなかった(さまざまな理由があるが、そのうちの一つは後述する史料収集の難しさである)。

19世紀末から20世紀初頭は、清朝の変貌・崩壊にともない、そして西欧国際体系と向き合うなかで、「中国」や「モンゴル」といった、政治的地位と領域(さらには「国民」)を備えた国家の形成を目指す動きが、アジアの中で同時継的に見られた時代であった。このような動きに連動・反応しつつ、ダライ・ラマ政権もまた、領域(境界)と政治的地位を国際社会との関わりをなかで確定しようと試みていたのである。本書が主な考察の対象とする時代を、19世紀末から1930年代に定め、これをチベットの「近代」として検討する理由の一つは、このようなアジアの共時性を意識していることにある。

ただし、民族・地域を超えた宗教的権威である歴代ダライ・ラ

○○○ 自著を語る

マを頂点に頂き、政教一致の体制をとったチベットにとって、近代国際社会のスタンダードに合わせて国家形成を行うことは多大な困難をともなうものであった。たとえば、ダライ・ラマ政権の支配領域には、政府・貴族・僧院の領地がパッチワークのように広がっていただけではなく、その外縁には、ダライ・ラマ政権と清朝に「両属」していたチベット系首長たちがそれぞれの権力基盤を維持して割拠していたからである。さらには、政権の領域内外を横断して、大小僧院の本末関係のネットワークが広がっていた。それゆえ、「チベット」の境界を定めるにあたり、英領インド・中国と完全な合意を得ることも難しかった。本書の副題にあるチベットの政治的地位と境界は、こうして20世紀前半を通じて「未確定」のままとなっていくのである。

しかし、国際的な承認を得ていなかったとはいえ、清朝崩壊後、ダライ・ラマ政権がチベット内部で内政・軍事・対外関係の実権を掌握し続けていたことは注目に値しよう。1913~1951年までのチベットが、「法的 (*de jure*)」ではなく、「事実上 (*de facto*)」の「独立」状態にあったと言われる所以である (Goldstein 1989)。本書の後半では、チベットと中国のあいだで展開した境界紛争を取り上げ、軍事衝突の経緯と、イギリスを交えて繰り広げられた停戦交渉・条約締結の推移を、ダライ・ラマ政権の視点から論じた。既存の研究は、イギリス帝国によるチベットに対する支援を強調する傾向にあったが、本書は英語・チベット語・漢語の史料を比較を通じて、ダライ・ラマ政権が自己に有利な独自の条文解釈をしながら政体の維持・保全を目指したことを指摘した。

本研究をおこなう上での苦勞の一つは、チベット語一次史料の調査・活用であった。日本史・中国史を研究する上で、日本語・漢語で書かれた史料が必要になると同様に、チベット史も、チベット語文献を用いなければ、チベット側の動向の具体像を知ることは難しい。しかし、そのようないわば当然の研究手法が、近代チベット史研究にとっては簡単ではない。当時のダライ・ラマ政権の政治・軍事・外交を知るためのチベット語文書史料の調査は、中国において大きな制約を伴うからである。従来の研究が、圧倒的な量を誇る英語や漢語の史料に依拠してきたのもやむを得ない側面がある。

この史料的制約を克服する上で、私は各地各国の文書館・博物館・図書館を訪問し、中国のみならず、中国国外に存在するチベット語文書史料を少しずつ収集し、各史料それぞれの関係について考察を進めてきた。それら史料には、イギリス・中国などとのあいだに交わした協定文書・停戦合意や、日本・アメリカ・ロシアなどとやりとりした書信が含まれる。特に、2019年に長野県上水内郡にある一茶記念館を調査し、そこに未整理のまま眠っていたチベット語文書が、かつて私がホートン図書館 (ハー

ヴァード大学) で見たチベット語書簡と深い関連を持つ文書であることがわかったことは感動であった。小さな偶然の発見ではあったが、ダライ・ラマ政権の対外関係を立体的に考察して提示する、本書の具体的なイメージが固まった瞬間でもあった。

こうして出来上がった本書ではあるが、未検討・未解明の時代や問題は多く残されている。第二次世界大戦、国共内戦、インド独立と連動しつつ、チベット史は新たな展開を見せていくが、本書はその1940年代以降の歴史を検討できていない。また、結局のところ、チベットは独自の国家形成を実現することなく、1951年に中華人民共和国に編入されていくのであるが、ダライ・ラマ政権自体はその後、1959年にいたるまで、共産党の統治と併存しつつチベットに君臨し続けた。毛里和子氏の言を借りれば、チベット版「一国二制度」とも言いうる状況が持続していたのである。そのダライ・ラマ政権が共産党統治下において解体されていくプロセスは、現代中国、そして現代アジアの原型が形成されていく過程を知る上で重要な課題であるが、これも本研究の射程を超えるものであった。

拙著に関して多くの方々からご意見やご批評をいただきつつ、次なる研究の構想を練りたいと考えている。

【文献】

毛里和子1998『周縁からの中国：民族問題と国家』（東京大学出版会）

Goldstein, Melvyn C., 1989. *A History of Modern Tibet, 1913-1951: The Demise of the Lamaist State*, Berkeley: University of California Press.]

【書誌情報】

小林 亮介『近代チベット政治外交史：清朝崩壊にともなう政治的地位と境界』（名古屋大学出版会、2024年2月、430頁）
[ISBN: 978-4-8158-1146-4]

人物叢書『高台院』

(日本歴史学会編集、吉川弘文館、2024年2月)

福田千鶴

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)

(基幹教育院)

『高台院』と聞いてピンとくる人は、かなり歴史好きな人だろう。ほとんどの方は「誰それ?」という感じではないだろうか。一方、「北政所と呼ばれた女性です」といえば、「ああ、豊臣秀吉の妻のことね」とすぐにわかってもらえるだろう。しかし、それはダメなのだ、ということを書の最初に指摘した。

北政所とは、平安時代に三位以上の公卿の本妻の呼び名だったので、正式には宣旨をもって摂政・関白の本妻の号として用いられたが、次第に宣旨がなくとも摂政・関白の本妻の称号として慣用的に用いられるようになった。よって、日本歴史上に北政所と呼ばれた女性は多くおり、秀吉の妻一人を指して称されたわけではない。秀吉の妻が生きていた時代に限っても、北政所と呼ばれた女性は複数いたのである。

人物叢書は、日本歴史学界で定評のある伝記シリーズだから、そのような学術書で誤った歴史認識を再生産するのはいかになものか、という問題提起もあり、書名を『北政所』とはせず、『高台院』とすることにした。

ところが、案の定である。高台院では誰だかわからないので、書名を北政所にしてほしいというのが、出版社からの要望だった。確かに、売上を考えれば、その気持ちはわからないこともない。筆者としても、多くの方に、本を読んでほしい。しかし、それでは学術的にダメなのだ、ということで押し切った。決断をしていただいた日本歴史学会、および吉川弘文館には、感謝の気持ちしかない。

さて、高台院とは、秀吉死後に出家した際の法号である。なので、なぜ法号を名乗る前の本名を用いないのか、という素朴な疑問があるだろう。そこが難しいのである。古文書が多く残る日本であっても、前近代の女性の名前はわからないことが多い。大名の娘であれば、生まれた時から「姫」と呼んでいけば事足りるので、生まれた時に名はあったのだろうが、名前が記録として残されていないことが多々ある。

高台院の場合は、杉原家の娘として生まれ、浅野家の養女になったので、名字も変わっている。実名は、古くは「ねね」とされていたが、彼女の書く書状に「ね」と署名したものが散見されるため、近年では「ね」、これに接頭語を付けた「おね」が定着している。

しかし、これも間違いであることを拙著で指摘しておいた。女性の書状には、自分の名前の一文字を略して署名する作法があるため、これは高台院が名前の一文字を署名したものとみなすべきなのである。たとえば、卑近な例だが、私の名で示せば、「千鶴」を「ち」とだけ署名するようなものだ。これも、女性の書状を多く調査してきたことにより、大きく主張できるようになった成果といえる。

よって、「ね」は正式の名前の「ねい」を略して「ね」と署名したのであり、それに接頭語をつけて「おね」と秀吉の書状等には記された。また、「ねね」は通称だったと考えられる。そのため、筆者は彼女のことを浅野寧(ねい)と漢字で表記するようにしているが、書名を『浅野寧』としたところで、「誰それ!」の状況が変わるわけではない。女性の名前は難しい。

こうした状況は、女性の名前に対する関心の薄さに多くは起因するのだが、現代社会においても状況はあまり変わっていないように思う。年賀状を夫婦連名で受け取ることがあるが、妻にも名字はあるはずだが、夫にのみ名字があり、妻の名前は夫の名前の脇に記されているだけのことが多い。

昨年いただいたある年賀状で、割注機能を使って、名字の下に夫婦の名前が均等に来るように印刷されているのを見て、心温まる気持ちになった。とはいえ、そのような女性の名前に配慮した年賀状をもらうことはまだ稀である。

妻の名前は「奥さん」であり、本当の名前を知らないで家族づきあいをしていることに疑問をもたない文化人も多い。

そんなことを思いつつ、これからも女性の名前にこだわることで、現代社会の問題にも提言していきたいと考えている。



『護るために殺す？アフリカにおけるスポーツハンティングの「持続可能性」と地域社会』について

安田章人

(地球社会統合科学府 包括的東アジア・日本研究コース)
(基幹教育院)

2024年11月末日に、秋田市内のスーパーマーケットにツキノワグマが侵入し、従業員にけがを負わせたうえ、店内に居座った。その後、罠で捕獲され、殺処分された。これに対して、100件を超える抗議があった一方、人間の命を守るために仕方ないことであるという殺処分を擁護する声もある。しかし、本書でとりあげているスポーツハンティングとは、人命や財産を守るためではなく、娯楽観光のためにおこなわれる狩猟である。当然、批判の対象となっている。2015年夏、ジンバブエで観光客に「セシル」という名前がつけられ、人気だった1頭の雄ライオンが殺された。特徴的な黒いたてがみを持つ13歳のセシルを狩ったのは、アメリカからやってきた1人のスポーツハンターだった。これに対して、世界中で非難の声が高まり、彼が経営する歯科医院の前には、「Killer (殺し屋)」と書かれたプラカードをもった人びとが殺到した。

ところが、スポーツハンティング、いわゆる娯楽観光のための狩猟は、残酷な行為であるとして倫理的な批判にさらされつつも、アフリカにおける野生動物保全政策の中核を担いつつある。それを支えるのが、「スポーツハンティングは、生態的な持続可能性と経済的な豊かさを保障する」という、いわば「護るために殺す」という論理である。こうした文脈において、スポーツハンティングがおこなわれている地域に住む人々への社会的影響とは、雇用機会の付与や利益分配という経済的便益の観点から、概ね肯定的に捉えられている。

しかし、スポーツハンティングが地域社会に与える影響とは、このような肯定的なものだけであろうか。本書では、カメルーン北部州を事例として、スポーツハンティングが地域社会に与える影響を実証的に論じることで、スポーツハンティングにおいて謳われる「護るために殺す」という論理を問い直すことを目的とした。

本書は、まずスポーツハンティングとアフリカにおける自然保護政策の歴史をひもとくことを導入とした。そこから現代におけるスポーツハンティングの位置づけを、時系列的に野生動物保全管理と倫理的観点から分析した。そして、カメルーン北部州におけるスポーツハンティングと地域社会の関係を、「光」と「影」

という肯定的および否定的側面から現状を分析した。

その結果、次のような考察をおこなった。現代のスポーツハンティングは、一部の研究者や政府によって、野生動物保全と地域開発を両立させ、生態的な持続可能性と経済的豊かさを実現し、ユートピアを創造するものとみなされていた。ところが、カメルーン北部州の狩猟区に住む人々は、生業活動の制限や強制移住などの社会的悪影響を受けていた。これには、「科学の権力性」を孕んだ「持続可能性」という言説、娯楽のための狩猟がもつ権力性、そして植民地時代から続くヨーロッパとアフリカおよび地域社会内の歴史的権力支配構造からなる、容易には抜け出せない重層かつ複雑な状況が背景にあることを指摘した。以上のような内容から、本書では、野生動物の保全管理における「護るために殺す」という論理、そして「持続可能性」という言説において、これまでの生態学的・経済的な観点とともに、地域住民の生活実践や地域社会の歴史と内実に対する観点の必要性を指摘した。



「Art is from but beyond life」 — 研究と私の物語

李 曉 燕

(地球社会統合科学府 社会的多様性共存コース)

(共創教育推進センター)

「私は日本の大学院博士課程に入学し、3歳の娘に『水』と『おしっこ』という日本語を教え、保育園に預けました。それ以来、日本の保育園や学校文化との新たな出会いが始まりました。ある日、保育園の連絡帳に『クーピーを持ってきてください』と書かれており、『クーピー』が何か分からず保育士さんに尋ねると、実物を見せてくれました。『ああ、クレヨンですね』と私が納得したところ、『いいえ、お母さん、クーピーですよ』と保育士さんが少し苦笑しながら訂正してくれました。この経験は、私が日本語を教える立場にありながら、子育てに関わる日常的な日本語が分からないという衝撃を与えました。この日を境に、新しい言語と文化の世界での“冒険”が始まりました。」(本書「はじめに」より抜粋)

「芸術は生活からきているが、生活を超越している」という言葉は、研究にも当てはまると感じています。大学教員の仕事の喜びは、自分が関心を持つテーマを深く研究できることです。日本での子育てという私自身の経験は、多くの謎や発見をもたらし、それが研究の着想源となりました。

2014年、学校文化をテーマにした研究を構想し、2015年には博報財団の「児童教育実践についての研究助成」に採択され、「学校プリントコーパス」を初めて構築しました。また、幸運なことに2016年には博報財団から研究優秀賞をいただき、この賞が大きな励みとなりました。そして2023年、約10年にわたって取り組んできた研究をひとつの形にまとめ、『学校プリントから考える 外国人保護者とのコミュニケーション』を出版することができました。

本書では、以下の3つの視点から日本の学校文化とコミュニケーションを分析しています：

1. 外国人保護者の視点

日本の学校文化や学校プリントの読解ストラテジーを紹介し、「学校カルチャー語彙」を抽出して分析しました。これらの語彙は日本人には当たり前でも、外国人には理解しづらい「暗黙のルール」が含まれています。また、外国人保護者と地域の方々のギャップや絆、改善点についてエピソードを通じて描きました。

2. 教育現場の視点

外国人保護者との関わりを通じて得られた知見や、地域と学校

の連携による支援の在り方について述べています。特に、学校プリントの伝統的価値や未来の役割を論じ、帰国子女の活用が教育の新たな可能性を開くと提案しました。

3. 日本語教育研究者の視点

日本語書記法の難しさを分析し、学校プリントに潜む文章の特徴や傾向を明らかにしました。これを通じて、異なる言語文化を共有する新たな視点を提案しています。

娘が幼い頃、「いつか本屋さんでママの本を見つけない」と言ったことがありました。最近、偶然天神の大型書店でこの本を見つけたとき、その喜びは言葉にできないものでした。

日本で生活する外国人女性として、日々キャリアと子育ての両立に奮闘しています。ある日、鏡を見て「なんだか疲れた顔をしているな」とつぶやくと、大学生になった娘が「苦勞して暗い顔をしている人もいるけど、苦勞していても強く輝いている人もいますよ。ママは後者になってね」と励ましてくれました。

これからも、生活の中から研究のヒントをいただきながら、苦勞しつつも輝けるよう努力を続けたいと思います。そして、この著書が多くの方々の役に立つことを心から願っています。



第27回国際昆虫学会議 (ICE2024 Kyoto) の成功に思うこと

阿部 芳久

(地球社会統合科学府 包括的生物環境科学コース)

(比較社会文化研究院)

2024年8月25日から8月30日にかけて第27回国際昆虫学会議 (ICE2024 Kyoto) が国立京都国際会館にて開催された。82の国・地域から4,278名 (海外2,957名、国内1,321名) の参加があった。全部で205のセッション (口頭176、ポスター29) が設けられ、2,817の講演 (口頭1,752、ポスター1,065) が行われた。閉会式では壇上に上がった我々、組織委員会 (Local Organizing Committee) 委員に対して参加者が総立ちになり拍手を送ってくださった。その拍手はしばらく鳴りやまなかった。会議の誘致・開催準備にあたった者の一人として大きな達成感に浸るとともに安堵している。

国際昆虫学会議 (International Congress of Entomology) は昆虫学関連のあらゆる分野を含む世界最大規模の会議である。第1回が1910年にベルギーのブリュッセルで開催されて以来ほぼ4年に一度、開催されている。1980年にはアジア初の国際昆虫学会議が京都で開催されているので、日本での開催は二度目であった。60の国・地域から2,259名の参加者があった1980年に比べ、今回は規模がより大きくなった。2022年にヘルシンキで開催された第26回国際昆虫学会議はもともと2020年に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため2年も延期した。そのためICE2024 Kyotoでは4年あるはずの準備期間が半分の2年になってしまった。また、新型コロナウイルス感染症が再び世界的に流行すれば2024年に国際昆虫



VIP Deskで待機中の筆者

学会議を予定通り対面で開催できるのか、開催できたとしても参加者が少ないのではないかと不安を抱えながらこの2年間はICE2024 Kyotoの準備を進めてきた。

日本では毎年、多数の国際会議が開催される中、2024年1月の閣議でICE2024 Kyotoは日本昆虫科学連合と日本学術会議の共同主催が認められた。日本学術会議は内閣府の組織であるため、ICE2024 Kyotoは日本政府も主催する国際会議となった。このことは、昆虫科学が日本では高く評価されていることを示している。昆虫科学の国際会議を政府が主催するなど米国では考えられない、と旧知の米国農務省の研究者は驚いていた。開会式では秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、厳粛ではあるが和やかな雰囲気の中で式典が執り行われた。秋篠宮皇嗣殿下からはおことばを賜った。悠仁親王殿下は客席側で御出席になった。御来賓として内閣府特命担当大臣と京都府知事、京都市長が出席され、御祝辞をお三方から頂戴し、内閣総理大臣のメッセージが御披露された。日本昆虫科学連合代表の私は、主催者挨拶をするという荣誉に浴した。開会式には2,282名の参加があり、本会議は幸先の良いスタートを切ることができた。



第27回国際昆虫学会議の開会式で主催者挨拶をする筆者



Ronquist博士のプレナリー講演で司会をする筆者

二日目から最終日にかけて六つのプレナリー講演が行われた。プレナリー講演とは参加者全員が聴く講演のことで、その会議を特徴づけることになる。私はICE2024 Kyotoの学術プログラム委員を務め、主にプレナリー講演を担当した。1) 講演内容と2) 研究活動をしている地域、3) ジェンダーの3項目それぞれのバランスを考えながら選考委員会が卓越した講演者の選考を進め、組織委員会で決定していただいた。まず、講演内容は昆虫生理学、昆虫食、昆虫系統・分類学、衛生昆虫学、昆虫と微生物の共生、森林害虫の管理というように偏りの無いようにした。次に、研究活動をしている地域は日本、東南アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、南米から各1名を選んだ。さらに、ジェンダーバランスを考えて女3名、男3名に講演を依頼した。講演依頼の段階から講演当日のアテンド役まで務めたおかげで、昆虫科学を牽引する先生方と知己を得ることができ、気軽に質問できたのでとても勉強になった。各講演の司会者はなるべく組織委員の中から研究分野の近い人を選んで依頼し、私自身はFredrik Ronquist博士（スウェーデン自然史博物館）の講演の司会・進行も務めた。同博士は世界的に使用されている生物の系統解析のソフトの開発ならびにスウェーデンの全多細胞生物相を解明する国家プロジェクトの起草などで知られており、昆虫



熱気あふれるポスター発表会場

科学の枠を越えて活躍している。また、彼はノーベル賞受賞者を決める委員会が設置されるスウェーデン王立科学アカデミーの会員でもある。私は1996年の国際昆虫学会議（於フィレンツェ）でRonquist博士と意気投合して夜は一緒に飲み歩き、フィレンツェ郊外で昆虫採集を楽しんだ。この時はまさか日本で国際昆虫学会議が開かれ、彼がプレナリー講演者に選ばれて私がその司会・進行を務めることになるとは夢にも思わなかった。彼がプレナリー講演を行った日の夜は彼の研究仲間も誘いspecial dinnerを楽しんだ。

一般講演も口頭発表・ポスター発表ともに大盛況であった。ポスター発表の会場では至る所で議論が繰り広げられ、大変な熱気であった。新型コロナウイルス感染症の流行が収束してくれて本当に良かったと思った。ウーアキョウ博士（当時、比較社会文化研究院特別研究者、地球社会統合科学府を2024年3月に修了）のタバチの卵巣成熟に関するポスター発表（ウー博士、楠見淳子教授、筆者の共同発表）には千客万来であった。彼女は多くの友人を作り、研究に関する情報を得ることができたのでICE2024 Kyotoに満足したそうである。



Welcome Mixerでの1コマ
（左端がウー博士、右端が筆者）

最後に、分野により事情は異なると思うが、地球社会統合科学府の大学院生には、国際会議に積極的に参加することをおすすめしたい。まず、自分の発表した研究内容に関する評価を、世界のトップランナーを含む様々な人から対面で聴くことができる。これが運命的な出会いとなり、共同研究や就職へ発展することがあるかもしれない。次に、世界の最新の動向を知ることができる（論文として発表される以前の情報を得ることが重要）。第三に、異なる価値観や視点で研究に取り組んでいる人々と交流することは、きっと自分の研究活動にプラスになる。第四に、専門分野を牽引する国際的な先頭集団に加わり人脈を形成するきっかけをつかむことができる。観光庁と文部科学省から各国公立大学法人の長などに向けて発出された令和6（2024）年5月21日付の「大学における国際会議等の誘致・開催の促進について」を読むと、国際会議等の誘致・開催は今や“国策”となった観がある。大学院生も若き主催者に育つことが期待されている。

この記事に掲載したすべての写真の著作権は日本昆虫科学連合に帰属する。

国際シンポジウム 「気候変動とZ世代へつなぐ人類の未来」

菅 浩 伸

(地球社会統合科学府 包括的地球科学コース)

浅海底フロンティア研究センターは、2024年1月6日(土)に Vena Energy Japanとの共催で「気候変動とZ世代へつなぐ人類の未来 / Climate Change and the Future of Human Beings Bridging our Future to Generation Z」と題した国際シンポジウムを、JR博多シティ会議室にて開催した。使用言語は日本語 / 英語併用とし、77名の参加者を集めた。

「地球温暖化」にかわって「地球沸騰」という言葉が使われはじめた。このシンポジウムでは、人類にとって大きなリスクとなってきた気候変動の実態はどのようなものか、人類が関与した現在の気候変動は過去の地球で起こった変動と比べてどのように違うのかを知るとともに、我々は気候変動に対してどのようなことができるのかを考えた。その上で、Z世代が社会の中核を担う2050年へ向けて、今どのような活動をはじめべきか、Z世代の若者と共に考える企画とした。

一つ目のキーワードは加速する「時間」である。1980年代初めには「地球温暖化」の認識はなかった。日本は高度経済成長を遂げ「このままの姿で進めば良い」と皆が思ったであろう。現在は急速にその状況が変化し、20年後、30年後にどのような世界になっているか想像が出来ない時代になった。現在の我々は、走りながら進む方向を見定め、柔軟に進む方向を正していく必要に迫られている。もう一つのキーワードは「空間」である。自然環境は世界各地で多様であるのに、人類が進めてきたグローバル化は世界を均一化しつつある。人間の力は強大になり、大規模に空間を改変することも容易になった。しかし、果たしてそれで良いだろうか。地球上には多様な環境が存在する。

まず、東京大学大気海洋研究所の横山裕典教授から『地球の気候変動と人間活動に関わる新時代「人新世」』と題した講演をいただいた。地球の気候に対して人類活動がその行方の鍵を握るといふ、これまでの地球史にない時代が到来している。現在の地質時代を人新世として完新世と区別しようという議論も進められている。背景には、世界人口の急増、経済の急拡大とそれに伴う肥料需要の増加などが挙げられる。その中でも看過できない人類活動の痕跡の一つに核実験が挙げられる。九州近



JR博多シティ会議室で行われた当日の様子
(下段の写真はMbarack DIOP博士)

海における地質試料でもその痕跡が確認されている。我々は科学研究によって「持続可能な環境」についての理解を深化させることが重要である。

つづいて、菅が『気候変動と地域：危機にさらされる太平洋・インド洋の環礁国や日本周辺の海』と題した講演を行った。環礁国であるモルディブ、マーシャル諸島、ツバル、キリバスでは、地球温暖化に伴う海面上昇やサンゴの白化が深刻な問題となっている。海岸侵食は海浜のみならず住民の居住域にも多大な影響を及ぼしている。日本近海においては、高水温によるサンゴの白化や磯焼け、熱帯低気圧の増加が起きている。適応のための対策が喫緊の課題であるが、地域の自然環境はそれぞれ異なり、地域によって気候変動の影響がどのように表出するかも異なる。気候変動への対応を考え実行する際、グローバルな問題とローカルな問題の間に、地域的な問題が存在していることを鑑

みる必要がある。

つづいて、国連「緑の気候基金 (Green Climate Fund: GCF)」のSenior Specialistとして活躍されているMbarack DIOP博士に『国連気候変動枠組条約を基にした「緑の気候基金」の活動』と題した講演をいただいた。GCFは新興国の温室効果ガス低減(緩和)と気候変動の影響への対策(適応)をサポートするため、国際連合枠組条約(UNFCCC)に基づく資金提供の制度の運営を委託された基金である。GCFは資金を効果的に管理・配分することで、気候変動の解決策のためのイノベーションと投資を推進する。化石燃料に依存することから脱却し、経済を活性化させるため、GCFは2030年までに500億米ドルを効率的に管理するビジョンと改革プログラムの理念「50by30」を掲げていることが紹介された。

つづいて、Vena Energyの日本法人であるVena Energy Japan株式会社で洋上風力事業開発ゼネラルマネジャーを務める石田恵介氏から『国内外における再生可能エネルギーの現状と課題』と題した講演をいただいた。二酸化炭素排出量削減は、人類にとって喫緊の課題かつ我々自身の問題である。パリ協定(2015年)におけるCO₂排出量削減目標の達成が課題解決への道である中、我が国は2050年までにCO₂の排出を全体としてゼロにするという目標を掲げている。洋上風力発電は再生エネルギーの主力電源化に向けた切り札と目されており、大量導入によるコスト低減と経済効果が期待されている。洋上風力発電導入の現状と先行事例について具体例を挙げながら詳しく説明していただいた。

最後に、スウェーデン留学中に環境活動家グレッタ・トゥンベリ氏とともに気候変動マーチに参加した九州大学共創学部・学生のレイク沙羅さんが『脱炭素を進める北欧の生活から見てきたこと』と題して、スウェーデンの事例を織り交ぜながら気候変動の課題を紹介した。ここでは炭素を排出する国々と気候変動の影響が大きい国々が異なることを図示し、先進国に住む人々や富裕層による化石燃料の大量消費や森林破壊などが気候変動を招いているにもかかわらず、その肩代わりを途上国に暮らす人々がすることに疑義を呈した。日本はCOP28において4年連続で化石賞を「受賞」している。このような現状を踏まえた上で、レイク沙羅さんがファシリテーターとなり、Z世代へつなぐ未来について講演者及び参加者とディスカッションを行った。

参加した学生たちからは、「気候変動への対策の中でZ世代に寄せられている期待は大きいと感じた。今後、我々の世代が中心となって気候変動に取り組むことになるが、そこでは気候変動の責任をめぐる世代間の対立ではなく、世代間の協力を期待したい」「シンポジウムで紹介されたような気候変動対策の先行的取り組みが存在することは今後に期待を持てるように感じた。

今後は政府や自治体主体の取り組みばかりではなく、上手にビジネス化した民間企業主体の気候変動への取り組みも必要だ」などの意見が活発に寄せられ、大人世代の一般参加者からも若者に対する応援の言葉が相次いだ。

社会の仕組みを変えることで可能になる気候変動対策は多く想定できる。将来を見通すことが難しい世の中でそれらの改革を実施するには、計画を実行する過程で修正しながら進むことも必要である。たとえばインフラや制度の整備には長い時間が必要である。将来、完成したものについて世界に向けた説明をする人はこれらを計画した人たちではなく、次の世代の人たちである。このため、様々な意思決定は科学的な思考を基に行われなければならない。今の若者たちには、積極的に意思決定に関わって世の中を動かしてほしい。

さらに、場所が違えば環境が違い、気候変化に対する応答も異なる。「環境に良いこと」も異なる。それぞれの地域で生きる人間にも環境や状況の違い、文化的な多様性があり、価値観も違う。グローバル化で世界がどんどん狭くなっている中では、特にこのことに思いを巡らせなければならない。その場、それぞれの空間にあった「適応」の仕方を考えていく必要がある。「地域の個性を知ること」は、多様な価値を認めるこれからの時代のキーワードに加えてほしいことである。

今後も世代を超えた対話を進めて共に良い未来をつくっていくことの想いを共有し、このシンポジウムを締めた。



シンポジウム告知ポスター

科学潜水啓発シンポジウム 「科学潜水とフィールドでの安全管理が拓く 科学のフロンティア」

菅 浩 伸

(地球社会統合科学府 包括的地球科学コース)

浅海底フロンティア研究センターは、2024年6月6日(木)に株式会社ワールドスキャンプロジェクトとの共催で「科学潜水とフィールドでの安全管理が拓く科学のフロンティア」と題した科学潜水啓発シンポジウムを、共進化社会システムイノベーション施設大会議室にて開催した。オンライン併用のハイブリッド開催とし、113名の参加者を集めた。また、シンポジウム前には、同施設2Fホールにて福岡市消防局による救急救命講習を実施し、学生約20名が受講した。

日本は海に囲まれており海的环境も地域によって変化に富んでいる。海の研究を進めるには絶好のフィールドである。このようなフィールドを生かして、研究者が直接水中で観察を行い試料採取ができれば、研究上のアドバンテージは極めて高くなる。一方、ダイビング調査ではしっかりした安全の確保も必要である。本シンポジウムでは、水中のフィールド科学の素晴らしさと安全にフィールド調査を進めるための考え方について、講演を基に参加者全員で議論する企画とした。

まず、菅が『未知の世界が広がる海中で新たな発見や感動に出会おう』と題した講演を行った。科学潜水 (Scientific Diving) は、科学者が主体的に行う潜水活動であり、ファンダイブ (Leisure Diving) と業務潜水 (Commercial Diving) の間に位置づけることができる。水中には研究者自身が潜水して観察することで判る科学的事実がある。水中でのデータ収集や試料採取のために潜水は欠かせない手段の一つである。

沿岸の浅海底に関する知見はきわめて少なく、研究者自らが行う科学潜水によって今でも数多くの発見がある貴重なフィールドである。最近マルチビーム測深やフォトグラメトリ技術によって海底地形図の作成が進化し、計画的かつ効率的な潜水調査が可能となり、貴重な科学的発見に導かれることがある。例えば、石垣島の名蔵湾では日本最大規模の沈水カルスト地形が発見され、それまでに想定されていなかった大規模な造礁サンゴ群集も発見された。これらが契機となり、その後の調査を踏まえて2024年3月に名蔵湾全域が国立公園に編入されることになった。



当日の様子(下段は質疑応答中の講演者)

水中にあり、一般の人の目に触れることが少ないものを対象とする科学潜水の成果は、科学的に可視化することによって社会に活かされることも多い。沖縄の海底に沈む米軍艦エモンズをマルチビーム測深と潜水調査により三次元的に復元し科学的事実を追求した研究成果は、メディアなどを通じて水中戦跡遺産として史実を伝え、平和を訴える題材になった。

この他にも、石垣島屋良部沖の水中文化遺産研究を基に、民間潜水団体のダイビングスペシャルティコースをつくり、アカデミックなダイビングガイドの育成と一般ダイバー向けの教材を作成した事例がある。科学潜水の成果を観光に活かし、ファインダイビングと科学潜水との間をつないだ例である。

科学潜水の成果を次世代の科学者に伝えることも重要である。これまでも潜水を伴うフィールドエクスカッションによって、国内外の研究者がその知識や経験を若い世代につないできた。最近フィールド離れが進み、このような活動が乏しくなってきたが、自然を相手にする科学だからこそ、フィールドの重要

性を再認識してほしい。そして、陸上だけでなく水中の自然に目を向けるためにも、科学潜水を発展させていく必要がある。

つづいて、日本サンゴ礁学会会長の中野義勝氏に『フィールドサイエンスを支える拠点と技術：マリンステーションと科学潜水』と題した講演をいただいた。人類のグレートジャーニーを支えた好奇心は現代科学として結実したが、現代科学に至る冒険や探検を行うための研究拠点の運営と、そこで行われる技術的アプローチとして科学潜水を考える。

まず、中野氏が研究フィールドとするサンゴ礁生態系における研究アプローチの認識を共有するため、多様性の高い熱帯起源の生態系、サンゴ礁の認識をめぐる時間軸と研究の諸相、世界・日本のサンゴ礁とサンゴ群集の多様性、サンゴ礁の発達と人間の定住等、分野横断的な解説がなされた。そして、海洋研究や海洋保全などを目的とした研究拠点であるマリンステーションの歴史と役割を紹介した。拠点型施設で実施する科学潜水は、エクスペディション（遠征）型の科学潜水と目的や管理方法が異なる。マリンステーションでは、気候変動の影響による海洋生態系の変化について継続的で安定した調査が可能だけでなく、立地地域の固有な生態系（例えばサンゴ礁）の多様性保全活動や研究を通して、次世代の海洋科学者や市民の環境保護意識を高める活動を行っている。長期にわたり地域との信頼関係を築き、安定した調査研究環境を維持・構成するには、科学潜水を含めフィールド活動を安全に行えることが必須であり、安全意識の積み重ねが重要である。科学潜水は研究のための技術である。研究目的の完遂には、陸（施設や自動車など）・海（船舶など）・空（衛星画像や空中写真、ドローン等の情報など）のさまざまな技術を連携させることが不可欠である。日本は欧米に比べて安全管理に関する人的・物的な支援が乏しいのが残念であるが、研究チームに加わる多くのスタッフの相互理解をもとに安全性と効率性を向上させる必要がある。

最後に、九州大学総務部危機管理室特任教授の福岡幸二氏に『科学潜水の発展を目標とした未来志向の安全』と題した講演をいただいた。2024年1月2日に発生した羽田空港での航空機衝突事故と奇跡的な乗客乗務員全員の脱出は、未来の科学潜水の発展と安全にヒントを与えてくれる。航空機事故は1977年3月27日に発生したテネリフェ空港滑走路上での衝突事故が転換点となり、航空業界、政府機関、国際機関、学術機関、科学が統合され、安全に対する考え方が大きく変化した。その過程でヒューマンエラーからヒューマンファクターに重点が置かれるようになったことは、科学的事故調査分析の発展に重要であり、事故予防に大きく貢献した。事故調査から得られた教訓を活用して航空機の機体や材質の改良、パイロットと航空管制官の用語統一、乗客の脱出権限をCAへ付与したことはリスクの低減と

被害軽減に貢献した。安全マニュアルは更新を重ねることに意義がある。周囲の環境の変化やリスクの再認識に応じて更新することが重要である。

1990年代に登場したスイスチーズモデルという理論がある。潜在的状況要因によって多数の防護層に生じたホール（穴）が一直線に重なることによって事故が発生するという理論であり、1つのエラーが事故に直結しないよう、多重防護で安全を確保するよう導くモデルである。さらに、SHELモデルは多重防護層が何であるかを具体的に示すことができることから、両モデルに基づいた多重防護層を構築することが提案されるようになった。世界の大学における事故対応及び事故研究では事故発生メカニズムの解明ではなく、個別事故への対応が主であり、事故モデルや科学的事故調査分析手法および統計学的観点を基にした研究や対応はみられなかった。事故を未然に防ぐためには、人為的なエラーが発生しても事故に直結しない、多重の防護層が必要である。安全にフィールド調査を進めるのは、多重防護層の考え方を現場に適用することが必要である。

最後に行った、総合討論では学生からの質問が活発で充実したシンポジウムとなった。企業やダイビング団体などからの参加者も多く、定期開催を望む声も上がっている。今後も機会を設けて、「科学潜水」を安全に行うための知識の集積と啓発活動を進めたい。潜水科学者についての社会的認知が進み、その担い手が増えればと願っている。



シンポジウム告知ポスター

【報告】学際統合的な視点からみた 継承語教育研究プロジェクト

松 永 典 子

(地球社会統合科学府 言語・メディア・コミュニケーションコース)

2023年度から2024年度にかけての「継承語教育研究プロジェクト」についての報告である。2023年度の日本語日本文化国際学術大会およびワークショップと2024年度の学術成果公開のための共著書出版について報告する。

- ・ **研究の背景**：在留外国人の人口は今や350万人を超え過去最多となっているが、その結果、多文化・多言語環境で育つ子どもが急増し、その教育環境の整備や支援に関する多くの課題が浮き彫りとなっている。特に、日本語指導や継承語教育に対する社会的支援の不足が、社会の担い手としての子どもの人権やキャリア形成の観点からも深刻な問題として私たちに突きつけられている。継承語は「家庭で用いられる言語で、社会の主要言語とは異なる言語」と定義されている。このため、継承語教育は学校教育や社会教育の範囲外の教育であり、家庭で教えれば良いといった観念が強く働く性格を有する。その一方で、継承語教育の重要性は、言語研究のレベルにとどまらず、民族文化の存続及び国家的戦略としてのマルチリンガル人材育成の面からも強く支持されている。
- ・ **本研究プロジェクトの目的**：本研究プロジェクトでは、従来の家庭内の継承語教育にとどまらず、まず、学校教育や社会教育の中で継承語教育がどのように取り組まれているか解明を図る。次に、言語教育、政治学、文学、心理学、といった複数の分野から継承語教育を取り巻く背景や意義を考察し、継承語教育をめぐる多層的な構造を明らかにする。
- ・ **本研究プロジェクトの意義**：本研究プロジェクトを通して、従来の言語研究からのアプローチに加え、さらに学際統合的な視点から継承語教育の必要性や重要性について提起できると考えられる。

【第6回 日本語日本文化国際学術大会】

- ・ **テーマ**：多言語多文化共生と日本語日本文化
- ・ **日時**：2023年12月2日(土) 9:00-17:30
- ・ **会場**：九州大学・伊都ゲストハウス、センター2号館
- ・ **参加者**：国内外の研究者および院生を含め約50名
- ・ **概要**：本国際大会では、日本、中国、韓国、台湾の3カ国・地域から約30名の研究者を迎え、「多言語多文化共生と日本語・日本文化」というテーマのもと、午前中は、基調講演、午



午前の部「基調講演」の会場の様子

後は3つの分科会を行った。

- ・ **基調講演**
 1. ベリーは、日本でどのように認識されてきたのか
朴三憲 (韓国建国大学日本研究学科、教授)
 2. 『清議報』に関する研究と今後の展望
王閔梅 (中国華中科技大学、准教授)
 3. 洗濯動作「乾」に関わる語彙の日中対照研究
—日本語「干す」と中国語「晾」を中心に—
黄愛玲 (台湾高雄大学、准教授)
 4. 社会にとっての継承語教育の役割を考える
—大学院での教育実践をもとに
松永典子 (九州大学大学院比較社会文化研究院、教授)
 - ・ **分科会**：以下のように多言語多文化共生と日本語・日本文化のテーマに即し、日本における多言語多文化教育の推進に関する課題と展望について討議を行った。3つの分科会のテーマはそれぞれ以下である。
 - 分科会1「日本語と日本文化」
 - 分科会2「日本語と日本語教育」
 - 分科会3「多文化共生と継承語教育」
- 2023年度の継承語教育研究プロジェクトのメンバーは以下である。プロジェクトメンバーは、それぞれ国際学術大会での研究発表、司会・指定討論などを担当した。
- ・ **継承語教育研究プロジェクトのメンバー**
 - 研究代表者：松永典子 (比較社会文化研究院・地球社会統合科学府)
 - 研究分担者：郭俊海 (地球社会統合科学府・留学生セン

ター)、施光恒(比較社会文化研究院・地球社会統合科学府)、波瀾剛(比較社会文化研究院・地球社会統合科学府、コロナトウスキ ヒェラルド(比較社会文化研究院・地球社会統合科学府)、山本明日香(比較社会文化研究院・地球社会統合科学府)

研究協力者: 黄正国(留学生センター・大学院人間環境学府准教授)、有田佳代子(帝京大学日本語教育センター・教授)、柳瀬智恵美(比較社会文化研究院・特別研究者)、李娜(現・山梨学院大学グローバルラーニングセンター・特任講師)、ランブクピティヤ・ディヌーシャ(久留米大学言語教育センター・准教授)、姚瑶(芸術文化観光専門職大学・講師)



国際学術大会参加研究者・中央は挨拶を行った岩田理事
(本学国際担当)

・本プロジェクトの学術的貢献

1) 学校教育や社会教育の中で、継承語教育がどのように扱われているかが明らかになること、多領域の視点から継承語教育を取り巻く背景や意義を提示することにより、社会全体の中で継承語教育を考える視点や国際比較による知見を提供することにつながる。この点は、研究院の学際研究に国際比較による分析という新たな学際研究の分析の視角を提示すると同時に、学府の進める学際統合教育の進展に寄与するものである。2) 国内外の大学との学術ネットワーク(新潟大学・帝京大学及び、中国・台湾・韓国の大学)を基盤に、国際研究集会を実施し、学内及び学府内の多様な領域の教員に加えて、学府修了生が活躍する他大学にも研究プロジェクトへの参画を仰ぐことにより、比較社会文化研究院及び地球社会統合科学府と国内外の大学との学際的・国際的学術ネットワークの拡大・強化に資することが期待できる。

【ワークショップ】

- ・テーマ: 糸島市の学校の多様な背景の子どものニーズと課題を考える
- ・目的: 多様な背景の子どもたちの抱える課題について、単に知識を得るだけでなく、課題や解決策についてともに話し合い、より良い選択を探っていく体験をする。
- ・日時: 2024年3月9日(土) 13:30-16:15

- ・場所: 伊都文化会館(糸島市前原東2丁目2-7)
- ・参加者: 学校教員、教育関係者、子どもの教育支援者、子どもの教育支援に関心のある方等20名
- ・グループ: A.日本語教育 B.母語・継承語教育 C.インクルーシブ教育
- ・全体進行: 九州大学大学院比較社会文化研究院・松永典子
- ・講師
 - A: 福岡市日本語サポートセンター日本語コーディネーター、福岡市立百道中学校教諭・原田徳子
 - B: 九州大学共創学部・留学生センター・郭俊海
 - C: 九州大学大学院人間環境学府・教育学部・宮本聡
- ・ワークショップ開催の意義: 参加者からは同じ課題を共有する人たちと話し合うことができ、たいへん有意義であったとのコメントが多数であった。実際、このワークショップを契機に、子どもの背景にある多様な言語や文化、多様性を尊重する意識づくり、環境づくりのために活動する「糸島多文化共生ネットワーク」が立ち上がり、現在子どもの日本語支援教室開設(2025年2月予定)に向け準備を行っている。このネットワークには本学府大学院生や学部生も参加し、ワークショップ参加者から自発的にこのような活動が生まれたことは、本研究プロジェクトの大きな効果である。



『日本社会と継承語教育』表紙・裏表紙

【『日本社会と継承語教育—多文化・多言語環境に育つ子どもたち』(2025年3月、九州大学出版会より刊行予定)】

2023年度の日本語日本文化国際学術大会における継承語教育の分科会における研究報告をもとに、2024年度は本研究プロジェクトの学術成果の公開のため、共著書の出版に向けて執筆・編集活動を行った。本書は継承語や母語母文化が当事者やその家族、民族に限らず、日本社会全体にとっても重要かつ不可欠な言語資源・社会資源であることを、さまざまな分野からの実例をもとに読み解いていく。

- ・謝辞: 2023年度の国際学術大会とワークショップは比較社会文化研究院院長裁量経費による助成を受けた。ワークショップは糸島市教育委員会の後援を得た。また、2024年度の共著書の出版は、科学研究費助成金21K00788(郭俊海)、19K13238(柳瀬智恵美)による助成を得た。

紆余曲折を経て博士論文を書き終えた経験から

上野 弘人

(地球社会統合科学府 包括的生物環境科学コース)

私の場合、博士後期課程の途中から研究課題を変更し、博士論文を書き終えることになりました。本来なら、一貫して同じテーマに沿って研究を進めた方が、研究者として一つ大きな柱ができ断然いいと思います。しかし、一方で自分のように異なるテーマでの研究を進めてきたことで良かった点もそれ相応にあったので、幅広く学び、研究を進める中で、時に戸惑うこともあるかもしれない後輩の皆さんに向け、少しでも参考になればと思い、それを書き残したいと思います。

私は、最終的に砂浜性甲虫を対象とした海流分散の可能性を評価する内容で学位を取得するに至りましたが、地球社会統合科学府に進学してから2年半ほどは、博士の研究として、南西諸島に生息する希少種であるマルバネクワガタというクワガタムシの保全を目的とした課題を進めておりました。秋に成虫の活動がみられるため、その時期にマルバネクワガタの1種が生息する石垣島の山中で個体にマーキングを施し、夜通し行動を観察することを1シーズントータル4週間ほど行うという、それなりにハードなものでした。大変な仕事ではありましたが、誰もやらないような内容であるがゆえにシーズンの移り変わりに応じた成虫のより詳しい移動分散の知見が得られたり、本種の保全上、他の生物との相互作用の面で重要な知見が得られたりと、やってよかったなと思える結果も得ることができていました。

このように保全を目的とした研究を進める一方で、実は学部生の頃から自分の中でやってみたくて思っていた研究があり、それが最終的に博士の学位となる昆虫の海流分散の研究でした。やりたいと思ったきっかけは、自分が学部生の頃、後の博士後期課程の指導教官である荒谷先生の授業を拝聴したことからです。マメクワガタなど海流分散が示唆される種の存在を知り、昆虫の海流分散の研究もいつかはやってみたくて思いつきながら学生生活を過ごしてきたのですが、地球社会統合科学府に入学してすぐのころ、以前から実験補助のアルバイトで親交のあった、当時、基幹教育院におられた先生と昆虫の海流分散の話で盛り上がり、海浜甲虫で海水に対する耐性能力をみてみようという実験を進めることにしました。すると思っていた以上の結果が得られ、その結果をもとに2020年度笹川科学研究助成学術研究部門にご支援頂き、研究をさらに発展させることができました。

博士後期課程で、並行して大きく2つの研究を進めていたわけ

ですが、自分が今後、どう研究を展開していきたいかという点で悩み、群集生態学の移動分散にまつわるもので貢献度の大きい研究を主軸におきたいという思いから主指導教官であった荒谷先生にご相談させていただき、博士後期課程の研究課題を変更するに至りました。このような急な変更にも関わらず、荒谷先生には、ご理解ご助力いただき本当に有難い限りでした。

このように、紆余曲折を経て、博士論文を書き終えることができましたが、何が博士論文を書き終えるまでに活きたのか振り返ると、学部生の頃から複数の学会や集会に参加したり、出会った人々と昆虫採集に出かけたりと、自分の興味に目を向け積極的に活動したことだと思います。昆虫の海流分散研究のきっかけとなった荒谷先生の講義も、実は、既に別の講義で単位を取得していたのですが、先生に知見を広げたいとお願いし拝聴できたものでした。海流分散の研究でお世話になった他学府の先生との出会いも、昆虫飼育のアルバイトの話があり、技術や知見を広げたいという思い、応募したのがきっかけでした。自分の興味のあることに全力で色々取り組んでいると、アイデア、きっかけ、人脈など、その後の自分を助けてくれるものに出会えると思います。

また、学生時代での研究生活では色々やっていたことで苦労したこともありましたが、現在の仕事に活かしていることも多いと思います。現在、私は九州大学農学研究院の方で学術研究員として、農研機構の研究者や農水省や各地方自治体、農家さんなど多くの方々と連絡を取り合いながら研究を進めています。博士後期課程の頃、環境省や各地方自治体と連絡を取るような研究内容をさせていただき、その経験が今の仕事を進める上でも間違いなく活かしています。

学生時代、研究を進める上で、幅広く、ときに、様々な壁にぶつかり、色々悩むこともあるかと思います。ですが、その時、その時にやれることを出来る範囲で構わないので、全力で頑張ってみてください。そこで得た経験や知識は必ず、いつか近い将来どこかで自分を助けてくれると思います。

研究・生活の嗅覚

ちん てい
陳 丁 シ ヨ ウ
(上海对外経貿大学)

すべてのものはそれしか持っていない、唯一無二の匂いがあると思っています。福岡空港国際ターミナルの匂いは上海浦東国際空港のそれと全く違いますし、中央図書館も福岡県立図書館と異なる匂いを持っています。古本屋で入手した『棘まで美し』に沁み込んだ強烈なお香の匂いが、武者小路本人も同じ香りを漂わせていたのではないかという錯覚さえ抱かせます。色・形でものを認識・感知するのは一般的かもしれませんが、どうやらわたしは、色や形よりも匂いで物を感じ取るくせがあるようです。

そのせいか、最初に日本近代文学実習室のドアを開いた瞬間、襲ってきたのは壁一面にずっしりと並んだ雑誌ではなく、古い印刷物とトナーの匂いに、かすかにコーヒーと茶葉の香りが混じっているような、文学に相応しいといえれば相応しい匂いでした。六年にわたる博士の生活は、まさにその匂いから始まったのです。埃をかぶった『文學界』、先輩の大好きなチャイ、工学部の友人と上高地から買ってきたかっぱせんべい……常に新しいものを受け入れている実習室は、その都度、新しい匂いが追加されていきます。部屋に入ったことのある人は誰でも、自分がここを訪れたことの証として何かしらのものを残します。そのものの匂いが少しずつ消えていくこともあり、実習室の一部になることもあります。

この繰り返しはコロナ禍のためいったん停止状態になりました。文化構造論の伝統として長年続いてきた論文添削セミナーも、対面からオンラインへと、開催形式の変更が余儀なくされました。〈実習室〉という場所を作り上げるためのこの重要なイベントは、形も匂いも伴わない、イヤホン越しの交流会に変わりました。機関誌関係の仕事で実習室に行かなければならない時も一人だけの作業が多く、ホワイトボードに書かれた *χαίρε* (こんにちは) が、ボードの隅でだんだん色褪せていくばかりでした。常時起動していた扇風機に、この寂しい部屋の匂いがすべて持っていかれるのと同じように、わたしたちにとっての当たり前前の生活も、コロナ禍にすべて持っていかれるのではないかと、ひそかに心配していたこともあります。

しかし、このような研究生活の中でも、わたしを支えたり励ましたりして、ともに厳しい状況を乗り越える友人がたくさんいました。直接会うことはできませんが、音声通話なりメールでのや

りとりなりで、互いにつなげようと頑張りました。ちょうど博士論文執筆の最中で、すらすら書けたものも頗る難渋したものもあって、一喜一憂する日々を送っていた時期ですが、ゼミ生から聞いた花散里の話も、歴史専門の友人からもらった門司港のチョコレートも、わたしの宝物です。いささか異色な生活ではありましたが、わたしにとっては貴重な体験にほかなりません。自分の好きなものが書けてよかったと、今でも心から思っ、あの輝かしい灰色の日々に感謝せずにはいられないのです。

緊急事態宣言が解除された次の日に、さっそく学校へ。友人と実習室で会う約束はしておきました。実習室に踏み入れた瞬間、印刷物とトナーの匂い、コーヒーとせんべいの香り……懐かしいものがいっぺんに鼻に入ってきます。この約束の場所は、いつまでもどこまでも、わたしたちを受け入れてくれる用意ができています。コーヒーを飲みながら『国文学』をひもといたり、友人と与太話をしたりすると、まるで実習室を訪れた最初の頃にタイムトラベルしたような、ほっとした気分になりました。思わず涙ぐみました。

実習室と研究生活の記憶も、これからの研究生活も、物の固有の匂いのように、わたしの一部になれた／なれるのでしょうか。なれるといいですね。



日本近代文学実習室内の風景

椎木講堂での学位記授与式を終えて

藤原 拓 広

(比較社会文化研究院 特別研究者)

私が地球社会統合科学府修士課程を修了し、同学府博士課程に進学したのは、2020年の春のことです。ちょうど日本で新型コロナウイルス感染症のパンデミックが始まった時期と重なります。そのため、修士課程の修了式は総代のみの出席となり、私はイースト1号館1階のB-112講義室で学位記を授与されました。

その4年と半年後となる2024年の秋、なんとか博士課程を修了することができました。その学位記授与式は昨年9月25日、椎木講堂に卒業生・修了生やその保護者が参列し執り行われました。4年半前とは違って、盛大に祝われるなかで地球社会統合科学府を修了できたことに感謝しています。

自己紹介が遅くなりましたが、私は、政治理論・政治哲学を主として研究しています。博士論文の題目は、『グローバルな正義を実現するための動機に関する研究——リベラル・ナショナリズム論の改善を目指して——』です。

その概要は、日本国際文化学会学会誌『インターカルチュラル』第23号(2025年3月31日発行予定)に博士論文紹介記事を掲載予定なのでそちらをご一読いただきたいのですが、簡単に言えば、国際社会における正義を実現するための動機について考察した博士論文となっています。一般的な人々が外国で暮らす人たちの基本的人権を保障したいなどと思えるような動機とはどのようなものか、を論じています。

こういった内容の研究に少しでも興味をもてくだされば、個人HPやresearchmapに業績一覧などを公開していますので、そちらをご確認いただければ幸甚です。

上述のような博士論文を書き終えて、博士課程を修了した私は今、特別研究者として比較社会文化研究院に受け入れていただいています。

その博論の書籍化を目指したり、アカデミックポストを探したりと、今後の課題が山積みの私にあまり偉そうなことは言えませんが、これから博論を執筆される皆様にとって少しは役に立つかもしれない事柄を、以下に書き留めさせていただきます。

研究分野によって違いはあるでしょうが、私が博論を書いた分野では、博士課程の大学院生は学術誌や紀要に論文を投稿しながら、それらの論文をまとめて大幅な加筆修正を施すことで博論の完成を目指すことが一般的になっています。要するに、常に博士論文の全体像を意識しながら、その博論の一つの章に

なるかもしれない雑誌論文や紀要論文を執筆しなければならないということです。

ここで案外役に立つのが、博士課程学生が半期に一度提出しなければならない「博士論文執筆計画書」だと思われます。提出頻度が多いからと言って形式的かつ簡単に済ませるのではなく、投稿予定の雑誌論文や紀要論文、そしてその先の博士論文の構想をしっかりと記しておいたほうがよいでしょう。計画書を丁寧に書くことで自らの頭を整理しつつ、構想を指導教員団の先生方と共有することができるからです。私の場合、大変ありがたいことに指導教員団の先生方が計画書を丁寧にお読みになったうえで有意義なコメントをくださったので、博論完成に向けての構想を整理・洗練させることができました。

それぞれの論文などを一つの博士論文としてまとめる最終段階で私が苦労したのは、各論文によって参考文献や注釈の形式が異なるということです。たとえばですが、本文中の引用箇所の出典を明示する際でも、文中に括弧で示す場合や脚注・文末注で示す場合があります。学術誌や紀要によっては形式が明確に定められているケースもあるのでそれだと仕方ありませんが、とくに定められていない場合は自分が博論で用いたい形式に揃えておくべきです。些末なことではありますが、それだけで博士論文を書き上げるときのストレスがかなり軽減されます。当然ながら、「言う(いう)」や「特に(とくに)」といった表記ゆれもできる限り生じさせない方がよいでしょう。

なお、上記の事柄は、学問領域や学府への在学時期が異なるとあてはまらない可能性もあります。したがって、博論執筆を進める際には、ご自身でルールを確認しておいてください。

これまで述べてきたように、博論執筆というのは時間も労力もかかる大変な作業です。こうした作業をするときに一番重要なのは、無理して体や心を壊さないということではないでしょうか。博論の完成に向けて努力しながらも、小説を読んだり、映画を観たり、友人と会話したりと、博論から離れる時間もしっかり作ったほうがよいように思われます。皆様も、心身を壊すことなく楽しみながら、素晴らしい博士論文を書き上げられることを願って本稿の結びとさせていただきます。

地球社会統合科学府 令和六年度 修士課程 修士論文題目一覧

1	日本の学校教育における性教育のあり方と潜在的な教育ニーズに関する研究： 大学生を対象にしたウェブアンケートと保健の教科書を用いた分析
2	中国とメコン地域協力 大メコン圏開発プログラムから瀾滄・メコン協力へ
3	英語スピーキングテストの自動評価における大規模言語モデルの可能性 —人間評価との比較による有効性の検討—
4	小中学校英語検定教科書における基本動詞とその意味の出現傾向に関する分析
5	多文化クラスによる異文化受容態度の変容—留学生の視点から—
6	ジオパーク学習における概念理解の促進に向けたコンセプトマップに関する研究
7	働きに見合った待遇の要求は不平等を拡大させるのか——分配的正義論における報いと平等——
8	舗装道路の人類学——ネパール・シンデュパルチョーク郡・G村における道路を取り巻く関係性の変容
9	中国宗族と父系出自集団の差異と収束——鄂東南宗族の事例研究
10	中国におけるひきこもり支援に関する実態調査——日本の支援制度を手掛かりに——
11	The Impact of the Development and Proliferation of the Platform-Based Food Delivery Industry on the Employment Patterns of Migrant Workers in China: A Study Based on Interviews in Guangzhou
12	太宰府市小正府遺跡の窯床試料及び瓦片試料を用いた考古地磁気研究
13	Exploring the ecological traits of the Japanese population of <i>Spalangia cameroni</i> Perkins (Hymenoptera: Pteromalidae) for its application in biological control
14	Taxonomic revision of the genus <i>Kagurargus</i> Ono and morphological comparison for mechanical isolation on the <i>Arcuphantes hikosanensis</i> species complex (Araneae: Linyphiidae)
15	「日本属性表示 (メイド・イン・ジャパン)」の構築、変化とブランド化：日本企業戦略の歴史分析
16	A systematic study of the genus <i>Ariadna</i> Audouin, 1826 (Araneae: Segestriidae) in Japan
17	縄文時代中期・勝坂式土器の分類と編年—既存編年の再検討とその含意—

○○○ 博士論文を書き終えて

18	糸島市姫島沿岸における海底地形・底質と藻場分布
19	現代中国語と客家語における「依頼」行為の直接性と間接性
20	F. A. ハイエクの無知の承認の上に立つ自由論
21	有田焼における産業集積についての考察 ——同業組合を中心に——
22	POLITICAL PARTICIPATION OF RURAL WOMEN IN PERU : The case of Yanatile district, in Cusco
23	廃棄古紙を利用した新規キノコ栽培の技術開発に関する研究
24	インクで描く越境文化：日本で活躍する中国系タトゥーアーティストの経験と表現
25	中国の「国際公共財」戦略：供給の目的と方法を中心として
26	頭蓋骨の顔面部形態からみた古墳時代の交流
27	デジタルストーリーテリングによる在日中国人児童の日本語作文教育における自己効力感の変容過程
28	テレビドラマから考察した感謝場面における日中の言語行動 —感謝への応答を中心に—

編集後記

『Crossover』第50号をお届けします。地球規模の諸課題に向き合う統合的な学際性を掲げた本学府が設立されて11年目を迎えた令和6年度は、新任教員6名が着任されたほか、英国学士院国際会員選出や8件の受賞など、国内外での教員・学生・修了生の活躍が一層めざましい一年となりました。執筆にご協力いただいた皆さまにあらためて御礼申し上げます。

広報・情報化推進委員会 クロスオーバー編集担当：松枝 佳奈

ISGSのロゴの説明



新学府開設にともない、「地球社会」に関するゆるやかに繋がる研究領域を6つのコース、「包括的地球科学」「包括的生物環境科学」「国際協調・安全構築」「社会的多様性共存」「言語・メディア・コミュニケーション」「包括的東アジア・日本研究」に編成しました。このロゴの三角形は、この6つの研究領域を象徴しており、それらが融合しつつ未来へと前進するようすを表しています。ロゴのカラーは、本学府の前身である比較社会文化学府のイメージカラーを引き継いだものです。



ISGS

GRADUATE SCHOOL OF
Integrated Sciences for Global Society

発行者 九州大学大学院地球社会統合科学府
発行年月 2025年3月

〒819-0395 福岡市西区元岡744
TEL : 092 (802) 5786・5787
FAX : 092 (802) 5791

ホームページ : <http://isgs.kyushu-u.ac.jp/>